
メモリアル・デー

ペロコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メモリアル・デー

【Nコード】

N2032E

【作者名】

ペロコ

【あらすじ】

リアルタイム更新（記念日）小説集です。基本短編ですが、話によつては続いています。というか、連作短編集のようなもので、一応繋がっています。新蘭平和快青が基本的に出てきています。全員大学生設定。その他、まだ誰が出るかもしれませんが、未定。わいわいガヤガヤとほのぼのストーリーが多いですが、たまに甘いのやしみりもあつたり。では、読んでいただけたら嬉しいですよ（*ハ・ハ*） 最終更新はクリスマススイブ！今年も1年お世話になりました！

サプライズ

服部平次は、かなり焦っていた。時間がもうギリギリである。もし遅れたらかなり怒られるに違いない。

原因は目の前にいる工藤新一だった。当の本人は、そんな平次の様子に気づかない。

「どないしたらええねん……」

小さく呟いた平次の苦労は、きっと昨日こんな役目を引き受けてしまったからだろう。

本日、5月4日は工藤新一の誕生日である。毎年、自分の誕生日を忘れるという天才的な能力の持ち主であるから、サプライズパーティーを企画した。言い出したのは、幼なじみであり彼女の蘭と、悪友の快斗である。

名づけて『いい加減覚えろよ！ 今年から忘れることが出来ないような誕生日にしてやろうぜパーティー』。

ちなみに、命名は快斗である……。

——さて、そんなこんなで5月3日に、参加する一同は米花駅近

くの喫茶店に集まった。平次・和葉・青子・そして計画者の2人である。

当の本人は、呼び出しを受けて警視庁へと行っている。その際、平次も行こうとしたのだが、快斗に勢いよく止められ、叶わなかった。

パーティーの名前自体は、一体何をやらかすのかと思わせるようなものだが、特別なことをするわけではない。

快斗が、パーティーの名前を紙ぶきを出しながら大々的に発表した時、

「すごい名前やな……」

と、小さく突っ込んだ平次と、目を点にした和葉と青子。蘭は不安げにみんなの反応を見ている。店に小さな紙が舞ったことについては、誰も何も考えていないらしい。迷惑極まりない。

そんなみんなの反応を見ながら、快斗は自慢気に言い放った。

「大丈夫だって！ 大したことはしねえし。ただ新一にちょっと、ね……」

「ちょっと、何よ快斗？」

「女装してもらおうと思っただけさ！」

たっぷりと間が空いた。

「ちょっと、黒羽くん？ もっかい言うてくれへん？ アタシ、耳がおかしなっただみたくで」

「大丈夫？ だから、新一に女装してもらってパーティーすんの」「……」

絶句する一同。すると、焦ったように蘭はいきさつを説明した。

「新一、怒ると思うんだけどね。誕生日覚えるには、インパクトが大事よね……って黒羽くんに相談したの。そしたら、こんな案が出て……」

「蘭ちゃん、快斗に相談したのが間違ってたんだよ」

「怒るところか、殺人事件が起きそうやけどな」

そもそもの間違いを訂正する青子と、ポツリと物騒なことを口にする平次。

「彼女として、それでええん？」

「ちよつと面白そうだなと思って。エヘ」

「『エヘ』やあらへん。——で、黒羽の計画では？」

和葉が尋ねると、いたずらを企む顔をして笑う蘭。

そんな蘭に小さく突っ込み、複雑な表情で、平次は快斗に尋ねた。すると、待ってましたと言わんばかりに、快斗は嬉々として答えた。

「まず、新一を明日必ず家へ戻って来させる。決めた時間に。その間に、残りの4人はパーティーの準備。帰ってきた新一をオレが女装させる」

「女装って、服はどないすんの？」

「蘭ちゃんに見繕ってもらうから」

「何で決めた時間にするの？」

「あまりに遅くなったらせっかくの料理が冷めちゃうでしょ？ 新一、放つといったらいつまでも警視庁に居座りそうだし」

快斗の中では計画は既に完璧らしい。次々と出される質問に答えしていく。

「誰が工藤を連れて帰って来んねや？」

「そりゃもちろん、平次だよ！」

「へ、オレ？」

「平次しかないじゃん。他はみんな忙しいんだからさ」

「黒羽は何すんねん？」

「オレも料理すんの。バッチリできるんだぜ？」

「さやか……。分かったわ。オレが連れて帰ってきたる」

と、諦めたようにタメ息を吐きつつ、平次は承諾した。

次の日、警視庁にこもっていた新一を連れ出したものの、予定の時間より少々早かったため、本屋へ入った。……これが、きっと間違だった。

本を読み出した新一は動かない。そして、冒頭へと戻るのである。もうそろそろ戻らないと、予定の時間より遅れてしまう。

快斗を始めとする、ある意味最強な彼女達のお叱りも受けることは間違いない。

「なあ、工藤。そないに気になるんやったら、買ったらエエやんけ」

「……………」

すっかり本の世界へと入り込んでいる。

「工藤。ほんじゃ、その本買ったるから！ はよ帰ろつな」

「…………… 本当か？」

「へ？」

ダメ元で言っただけの言葉に反応されて戸惑う。

「これ、買ってくれんのか？ 高えんだよ、この本。いやあ、助かる！ サンキュー！」

今更、嫌と言えなくなった平次は、これも計画のためや！ と涙の決意をし、4000円もする本を買わされた。

上機嫌な新一は、この後自分に降りかかる屈辱を知らず、大事そうに本を抱えて歩く。

その横で、ポケットに手を入れて、平次は今月ピンチや……と青くなりつつ、ポケットの中の携帯から快斗へと着信を入れておく。工藤郎が見えた合図である。

そして、その数十秒後、玄関のドアを開けた新一は——突然視界を白い大きな布で覆われた。

「なっ……！？」

驚いて声も出ない新一を素早く2階へ運び込み、簡単にはほどけない複雑な結び方で縛り上げた。

さすがというべきか、新一に反応する隙を与えない。

「ちょ、え？ 快斗！？」

「んふふー。当たり前！」

心当たりのある人物の名を言うと、嬉しそうな声と共に白い布が取り払われる。

「何してんだよ、ほどけ！」

「ヤダ。新一、暴れるもん」

「あたりめーだろ！」

「だから、お休みv」

プシューッとスプレーをかけられ、

「て……め………」

と、呟いて新一の記憶は途切れた。

それから、どれくらい経っただろうか。

新一が目覚ますと、正面に快斗の顔があって、一気に記憶がよみがえった。

「んゝ、さすがオレ！ 新一、似合ってるよ」

思い出した瞬間怒鳴ろうとして、それを遮るように言われた快斗の言葉に思考が持っていけなかった。

「？ 何がだ？」

「ホイ、鏡」

姿見を遮っていた快斗が脇にどくと、そこには自分が写っていた。……いや、写っていたはずだった。

鏡に写っていたのは、爽やかなブルーのワンピースを着た長髪の

女にしか見えない。

ガチャとドアが開いて、蘭が入ってきてその場で足を止めた。

「新一……すごく綺麗……」

「やっぱり？　蘭ちゃんの見立て、すごくいいよね！　サイズもぴったり。さすが彼女♪」

「ちよっ、黒羽くん！」

当の本人は固まっているが、2人の会話は続く。蘭の顔が快斗のからかいで赤く染まった。

部屋の電気で少し光沢を放つワンピースは、薄手の七分袖で長めのスカートだった。左の腰の位置で、大きめのリボンが結んである。髪の毛は、黒の長いストレートのカツラをかぶらされており、髪が背中まで達している。顔は、ほとんど分からない程度のメイクがしてあるが、よく合っている。

誰の仕業かなんて、言われなくてもすぐに分かった。

「……快斗」

ポツリとドスの利いた声で名前を呼ばれた当の本人は、どこ吹く風で知らんぷり。

「これはどういうことだ。ああ？」

凶悪犯も震え上がるような口調で尋ねられても、

「いいからいいから」

と、ニヤニヤする始末。新一の顔は、怒りからか羞恥からか、ほんのり赤く染まっている。

「それじゃ、新一。行こ！」

「え、蘭！？」

突然手をつかまれ、そのまま階段を降りる。快斗は、その2人の後をのんびりとついてきた。

そして、閉じられたリビングのドアを開け――

パンパンパン！！

「誕生日おめでとー！！」

クラッカーの音に続き、響く声の主は、新一のよく知る人たち。驚く新一に次々かけられる声は、

「綺麗……」

の一言で、ハッと我に返った新一は叫んだ。

「綺麗って言うなー！！！！」

工藤邸どころか、隣の阿笠邸まで聞こえたと、後に隣人は語った。

その後は、ごく普通のパーティーだった。4人で腕を振るった料理は、新一の機嫌をわずかながらも浮上させた。

だが、皆で写真を撮るということになった際、嫌がる新一を無理矢理カメラに収めた快斗には、無数の傷跡があったとか。

その写真は現在、蘭の一存で工藤邸に飾られている。その時、『別れるか、飾るか』と蘭に究極の選択をさせられたとか。

以来、それを見るたび、悪夢のような自分の誕生日を思い出すため、忘れることはなくなったという……。

サプライズ（後書き）

【新一さん、ハッピーバースデー！】

こんにちは、ペロコです。

記念日小説集として、今回から書いていくことにしてみました。多分、短編集です。1個1個毎回短編で書いてたらすごい数になりそうだったのでまとめた感じです。

記念すべき第1話は5月4日。新一の誕生日です。そして、新一さんごめんなさい（笑）

女装したらきつとキレイなんだろうなあ……という、ありえない考えが浮かんでしまつて。

以前、ご要望をいただいたので、新しいパターンでみんなでガヤガヤの記念日小説にしてみました。

『Calling』よりも時間的には進んだ段階ということ。

新一に『快斗』と呼ばせてみました♪非常に楽しかったです。

いかがでしたでしょうか？ たくさん感想、いただけたら嬉しいです！ よろしく願います。

今のところ、それぞれの話はその順番通りに時間がリアルタイムで流れているという風にしようと思っています。もしかしたら独立しているかもしれませんが。全てが未定。記念日が近づいた時点で書いていくので、話がこういう風になっていくのか全く分からないのです。

次回記念日は6月21日ということで、次話はその時に更新となります。

下準備

オレ、工藤新一は忘れていなかった。1ヶ月前の自分の誕生日のことを。

あの屈辱・怒り・羞恥……そして、その最大の元凶である快斗のことを。

自分の誕生日を祝ってくれるのは、そりゃ嬉しい。だが！　だ。あのやり方はヒドい。『あんな計画を考え出したのが誰か』なんて、推理するまでもなく、すぐに分かった。

快斗だ。

あんなバカバカしくて、しかもオレに精神的にダメージを的確に与える事ができるやつなんて、快斗しかいねえ。ある意味尊敬するぜ、マジで。

だから、今度はオレの番ってわけだ。まあ、文句なんて一切受け付けねえ。

しっかりと報復を受けてもらわなけりゃ、オレの気が済まねえし。

ただ、1つ大きな問題があった。アイツはオレみてーに誕生日を忘れるなんてしねーから、誕生日に呼び出しても、サプライズになんねえ。しかも、鋭い。何か裏で計画してることを敏感に察知しやがる。

さすが、元怪盗ってところか。

……って感心してる場合じゃねー。弱点を見せようとなしない元怪盗の弱点発見と内容を考えるために、あの悪夢の時のメンバー（快斗以外）にメールを出すことにした。

『来週、快斗の誕生日パーティーやろうと思ってんだけど、何かいい案ねえ？ 一発驚かせられるようなやつ。あん時の仕返ししてーんだ』

少し待てば、みんなから返事は来た。まず、蘭。

『あんまりヒドいことはダメだよ、新一。普通にお祝いしてあげよ？ 先月のは私にも責任あるし……』

くっつ、優しすぎだぜ、蘭。

ただ、オレの怒りはまだ収まってねえんだ。蘭の言う“責任”って何か知らねえけど、きつと快斗の暴走を止められなかったことに責任感じてんだな。何でも背負い込みすぎだ。

次は和葉ちゃんからだ。

『えー？ 工藤くん、めっちゃキレイやったで？ 黒羽くんの腕はやっぱプロ級やと思ったもん。むしろお礼したいぐらいやわ。エエもん見せてもーたし』

……何でだ？ 何でアイツの味方なんだ？ ましてや“お礼”！？
ありえねー！……！！ 次！ 服部か。あんま期待してねーけど。

『とりあえず落ち着けや、工藤。黒羽の弱点なんて見たことあらへんし、分からんわ。スマンな。けど黒羽はめっちゃ鋭いから、気づかれたら終わりやで』

んなことは分かってんだよ。あ？ 追伸？

『けど、中森さんやったらきつと何か知ってるはずや。幼なじみやねんし、きつと色々知ってる思うで』

そうだよ！ 中森さんだ。……って、まだ返事きてねーんだよ。

あ、来た。ラスト真打ち！

『遅くなつてごめんね、工藤くん！ 快斗が今まで目の前にいて……。青子は何考えてるのか、快斗には分かつちゃうみたいで。あの時の工藤くん、キレイだったな。快斗に焼き増ししてもらっちゃった。アルバムに入れてあるんだよ。って、快斗の弱点だっけ。魚が嫌いってことぐらいしか分かんないや。快斗、青子にも弱点とか教えてくれなくて。無いのかな？ 快斗、完璧主義だから。それでね、何で魚が嫌いなのか分かんないんだけど、海にも潜れないし、たい焼きも鯉のぼりもダメなんだよ。子供じゃないんだから、ちゃんとしてほしいのに……』

……なんか、半分のろけられやような気がしなくてもねーけど、かなり有益情報じゃねえか！ さすが幼なじみ。

魚かぁ……。そうだったんだ。こりゃいいぜ。これで決まりだな。覚悟しとけよ、快斗！ 1週間後が楽しみだ。さっそく再びみんなにメールを！

『決まったぜ、来週の快斗の誕生日パーティーの内容。そのために、ちよつとやつてもらいてーことがあんだよ。ぜってー、快斗にバレないようにしてくれよ？ いいか？ ……………』

下準備（後書き）

【記念日じゃないけど更新】

こんにちは、ペロコです。新一さん一人称は（確か）初です。

すっ、すいませんー！　どこが短編だよ。2話目にして既に違うじゃん！

でもですね。言い訳になるかもしれませんが聞いてください。
これが必要なんです。この段階が。

考え始めたのは、今月に入ってから。そしたら、どう考えても2回に分けないといけない内容になっちゃったんです。

新一さんの怒りは収まってないよー&ちよつと勘違い編（笑）

あの悪夢の誕生日パーティー計画者に蘭ちゃんが入っていたことを彼は知らない。まさに知らぬが仏（笑）

それぞれのメールを書くのもなかなか無いので貴重デス。

カテゴリの『友情』からそれていつてるような気がするの、きつと気のせいです（汗）

新一さんがどんな計画を立てたのかは、来週のお楽しみ♪リアルタイム更新って、こういうのが楽しいんです！

では『下準備』についての感想（ってほとんど進んでませんが）いただけたら嬉しいです。来週をお楽しみに！

まあ、ある程度予想できるとは思いますが……。

自業自得

黒羽快斗は浮かれていた。それはなぜか。答えは簡単。今日が快斗の誕生日だからである。

お祭やイベント大好き人間であることを自他共に認める快斗は、気づいていた。

「嬉しいな〜」 オレのパーティーしてくれるなんてさ！ お礼のマジックはいつも以上に気合い入るね」

付け加えておくが、呼び出したのは新一である。

滅多に鳴ることのない新一専用の着メロが鳴った時、快斗は驚いた。

「あ、あの新一から電話!？」

普段、自分から連絡を取ることはなく、取ったとしても素っ気無いメールで済ませてしまう新一からの着信なのだ。天変地異の前触れか。それとも、明日は季節はずれの雪でも降るのか。

数秒ほどフリーズして、我に返って焦って電話に出ると、

「……遅え」

開口一番怒鳴られてしまった。

「ゴメンゴメン。あまりに珍しいからさ。どうしたのさ？ 電話なんて」

「悪かったな、いつもメールで済ませるヤツで」

「いや、だからゴメンってば。用件をお先に……」

「あ、そうだった。今度の土曜日3時、オレン家来い。いいな？」

「……ち、ちなみに拒否権とか選択権とかは……」

「ねえに決まってるんだろ？」

「やっぱり。——なんかあんの？」

「来れば分かる。じゃあ土曜日3時にオレン家だぞ」

ブチッ。ツーツーッ。

とまあ、いかにも怪しく、そして堂々とオレ様っぷりを披露してくれた新一からの呼び出しというこれまた怪しいお誘いに、快斗は乗ったのである。

別に新一ほどの推理力など無くても、パーティーをやってくれるであろうということは、すぐに分かった。

そして、現在の時刻は午後2時58分。

「時間には正確に、ってね」

視線の先に工藤邸が見えてきた。

そして、3時ジャスト。

ピンポン。工藤邸に來客を告げるベルが響いた。――それは、これから始まる悪夢のホイッスルでもあることを、快斗だけが知らない。

ガチャとドアが開き、新一が出てきた。

「時間ピッタリだな、元怪盜」

「もちろんですよ、名探偵」

「ま、とりあえずあがれよ」

中に入り、快斗は分からないフリをして、新一に尋ねた。

「なあ、何の用だよ？」

「リビング」

「は？」

質問の答えになっていない。

「用件はリビングで。ほら、早く行け」

「新一サン……。客を先に上げらせるって……」

そう言っただけで快斗は呆れるが、新一はお構いなし。

「勝手知ったる何とやら、だろ？」

リビングのドアは閉まっていた。

「……」

「……んだよ。早く開けろ」

「何企んでるの？」

「別に何も？」

「……………」

「……………」

双方、睨み合いが続く。

「…………分かった。じゃあ、開けるよ？」

「早くしろ」

ガチャ。パンパンパン！！

「うおわっ！」

「……ハッピーバースデー……！！」「……」

「いやあ、ありが……と！？」

ドタッ。

お礼を言い切らない内に気絶して倒れてしまった。

「あーあ。こりゃ予想以上だな」

「ね、ねえ新一。いくら何でもやりすぎじゃ……………」

「そうやで工藤くん」

「オレにあんなコトさせたバツだから当然だ」

そう言う新一が指差すのは、今も飾られている先月の写真。

「まあ、分からんでもないけどなあ……………」

「快斗、いつ起きるだろ」

「んじゃ悪いけど、飾り全部外すぜ。コイツが目え覚める前に」

——今現在、工藤邸のリビングは見事なパーティー用の飾りで溢れている。……魚の。そう、魚で溢れているのだ。

季節はずれの鯉のぼりを引っ張り出してみたり、それぞれが持っている魚の小物だったり、お手製のイラストだったり、それはもうたくさん。

ドアを開けて目に入るのは、大きな魚のイラストなのだ。

倒れた快斗はそのままにして、それらの飾りを全て外す。そして、通常のパーティー風にしたところで、新一が快斗に声をかけた。

「おい、快斗！ どうしたんだよ？」

「……ん？ ……さっ！ さの付くヤツがいつぱ……いつてあれ？」
「夢でも見たんちゃうか？」

「平次……。いや、違う。ここに入ったらそこら中に！」

「いきなり倒れるからビックリしちゃったよ。ホラ、早く座ってよ！ パーティー始めよ？」

「青子……。そうだな！ あれは夢だ。あんなのがここにあるわけねえもんな」

ひたすら誤魔化し続けるうちに、ようやく『夢』だったと判断した。……いや、させられた。

「いっぱい作ったんやで！ たくさん食べてな」

「うわー、マジで嬉しい！」

「デザートにケーキもあるからね」

「ケーキ！？」

「甘党の快斗のために、一生懸命作ったんだよ」

「まずは乾杯といくか」

そして、テーブルの上に乗せられた大量の料理が、6人のお腹へと消えた頃。

「そろそろケーキ食べよか」

「よっ！ 待ってました！」

平次の提案に、快斗がノリノリで答えた。蘭が冷蔵庫から白い箱に入ったケーキを取り出し、持ってくる。

テーブルの上に乗せ、新一が箱のフタに手をかけた。

「甘党の快斗のために蘭たちが必死で作ってくれたんだ。しっかり食えよ？」

そう言って、白いフタをあけた。そして、うきつきと中身を覗き込んだ快斗は……

「ギャーーーーッ！！」

と叫んで、再び気絶してしまった。その叫び声は、近所一帯に響き渡り、それを聞いた近所の住人は、通報するか本気で迷ったらしい。

ちなみに、白い箱の中身はもちろんケーキである。『魚型』ので

はあるが。

一体何を使ったのか、クリームの色は青く、目の代わりにいちごが飾ってあった。そして、鱗代わりに固めたゼラチンを1枚1枚乗せてある。そして、透き通ったそのゼラチンは、クリームの青色を見事に反射させている。

見事な『魚』を追求した、究極の一品。もちろん、味の保障はきちんとしてある。

新一の仕返しは、あの飾りだけでは足りず、無理を言って魚型のケーキの製作を女性陣に頼んだのだ。

そのケーキはもちろん、食べることも見ることさえも出来ず、復活した快斗の目の前で残り5人が——新一は快斗への嫌味のために根性で——綺麗に食べきり、甘党の快斗はケーキ無しの誕生日となった。

黒羽快斗、本日の教訓。

『危険！ 新一をからかうな』

お礼のマジックの計画が消え去ったことは、快斗だけが知っている。

自業自得（後書き）

【快斗さん、お誕生日おめでとー！】

こんにちは、ペロコです。快斗、そして青山先生、お誕生日おめでとーございます。

まずは快斗。スマヌ（笑）楽しくて楽しくて仕方ないですv

都合により2話に分かれてしまいましたが、お楽しみいただけたでしょうか？ こうやって分割することは今後もあるかもしれませんが、よって、あらすじも変更しておきました。お気づきになりました？ 『リアルタイム更新記念日小説集』です。もういっそのこと、『リアルタイム更新小説集』の方がいいですかね。記念日じゃなくても、ガヤガヤしてるのが書きたくなったら、ここで書く、みたいな……。ご意見待ってます。

青子によってもたらされた魚嫌いの情報は、こういった形でとりあえず消化されました。……が、今後もこのネタによって遊ばれるんだろつなあと他人事で思っています。

1話から流れが存在しているので、今後も微妙な繋がりが現れてくると思いますので！

今回は（おそらく）7月7日、七夕ですね。おそらく、というのは、どうなるかさっぱりだからです。一応考え始めてはいるんですが、形になっておりません。でも書きます。絶対に！
それでは、次回もお楽しみに。

評価や感想は大歓迎です。いつでもどうぞ。上記のご意見もお待ちしています。

星に願いを

「……七タパーティー？」
「うん！」

本日のイベントは、中森青子の提案からスタートした。

7月7日、晴れ。時刻はもうすぐ昼の1時になるうかという頃。大学の食堂に集まっていたいつものメンバーに、青子が七タパーティーをやるうと笑顔で提案した。

「いいね！」と賛成を示したのは、女性陣だ。一方、男性陣はどこか渋っている。

「七タパーティーって何するんだ？」

「せや。別にパーティーにしゃんでもええやん」

と、パーティーに対して新一と平次は疑問を持っている。

「子供じゃねえんだし」

イベント好きの快斗も反対のようだ。

「笹を飾って、みんなで願い事書いて……」

「あとは普通のパーティーみたいなものよね」

「何か食べたり飲んだりとかな」

「笹は青子が準備するから大丈夫だよ」

「ケーキ屋とか行ったら何か売ってるかもな」

「帰り寄る？」

男性陣の意見はそっこのので、女性陣の中では、既にパーティー

をやることは決定のようだ。

「ふーん、まあええんちゃう？」

「晴れだし、一応星も見えるだろ。天の川は厳しいかもしれないねえけど」

新一と平次は、やる事自体は大丈夫のようだ。残るは……

「オレはいいよ」

快斗だけだ。

「どうしたんだよ快斗？ あんなにイベント好きのやつが」

「……ちよつと、ね」

齒切れが悪い。だが、口を閉ざした天下の元怪盗は、幼なじみの涙にだけは弱かった。

「快斗、参加しないの？ 一緒にやりたいのに……」

目を潤ませ、青子が上目遣いで尋ねると、快斗は目をそらしながら、たどたどしく答えた。

「先月以来、さ。ちよつとトラウマみたいなのが……」

「トラウマ？ 何かあったのか？」

「……………オレの誕生日パーティー」

快斗が白状した時、5人の顔は納得の表情を浮かべた。先月の一件は、快斗の中では忘れなくても忘れられない出来事なのだろう。それほどまでに、新一の仕返しは強烈だったのだ。

全員の視線が新一に集まる。

「……オレのせい？」

自分を指差し、小さく呟く新一に、5人は頷いた。

「新一が何とかしてよ？」

「何とかって……」

「新一のせいでしょ？」

「ぐっ……」

言い返せないのは事実だから。何とかするしかない。そう思い、快斗に声をかける。

「快斗、やろうぜ。中森さん泣かせたくないだろ？」

半ば脅しのようで卑怯ではあるが、手段は選んでいられない。そうでなかったら、自分に全てが襲い掛かってくるのだ。蘭にいらまれたが、文句は言われなかった。青子を泣かせたくないのは、同じだからか。

「な？」

「……分かったよ」

決断するのに間があったが、承諾はさせた。

「よかったあ！ それじゃあ、笹もらったら行くね！ あ、もう授業始まっちゃう！ それじゃあまた後でね！」

今までの涙は何だったのか、突然宣言するだけして、青子は立ち

去った。

「行くつて……どこへや？」

「さあ？」

この問いに答えられる人は、この場にはいなかった。

そして、時間は過ぎ去り夜8時。空には薄雲がかかっているが、星は少なからず輝いている。

「……で。何でオレの家なんだ？」

場所は工藤邸。いつもと変わらず工藤邸。

「え、だって広いし」

……だそうだ。

「分かった。広いのは認める」

一般人からすれば、何とも怒りの湧き上がることをさうと言った新一は、次なる疑問を口にした。

「何でコイツ等がいるんだよ？」

「「「おじゃましてまーす!!」」」

今はもう3年生になった探偵団である。

授業の関係で帰宅時間が遅かった新一は、工藤邸に明かりが灯っているのを不思議に思い、笹があるのに首をかしげ、家の中で行われているパーティーの準備を見て納得し、探偵団の姿を見て頬を引きつらせた。

「ケーキ買いに行った時に偶然会ったの」

「それで話したら来たいって言うたから」

話していた通り、ケーキ屋に寄った時に会って、そのまま一緒に帰ってきたらしい。

「迷惑だったかしら?」

もちろん灰原も一緒である。

「イエ、トンデモアリマセン」

かなり棒読みだったが、灰原はフツと笑っただけだった。

「もうみんな願い事書こうかって言ってたところなの!」

「新一お兄さんも、はい。短冊です!」

折り紙を切ったものに、みんなで願い事を書いていたようだ。

「オレはもう書いたぞ!」

「え、何て書いたの?」

青子が嬉しそうに元太に聞くと、

「うな重がいつぱい食べますように!」

実に彼らしい答えが返ってきた。

「またですか……」

「元太くんってば、いつも同じこと願ってるじゃないの!」
「う、うるせー!」

やり取りは1年生から変わっていなかった。何だか微笑ましくもある。

「平次は何て書いたん?」

「オレか? まだ決めてへん。和葉は?」

「アタシは、みんなが仲良く過ごせますようにって」

「あ、あたしと一緒に!」

「ホンマ? じゃあ、絶対叶うな!」

「うん!」

蘭と和葉は笑いながら、自分の書いた短冊を見せ合った。一方……

「快斗は何て書いた?」

「世界一のマジシャンになる! ってね」

「なーんだ。さか……」

「ストップ! また気絶する! 青子は?」

「快斗のさかな……」

「だああっ!!」 冗談はいいから!」

「まだ決めてないの」

「早くしろよ、言いだしっぺ!」

……子供の会話である。

「灰原は書かねえのか？」

「そうねえ……。どこかの探偵さんがきちんと検診を受けてくれま
すように、かしら？」

「……申し訳アリマセン」

「光彦は何て書いたんだ？」

「僕ですか？ 僕は探偵になりたいって」

「へえー、何で？」

「ライバルがいますから。永遠の」

「？ ふーん？」

すると、快斗と蘭も新一の側にやって来た。

「歩美ちゃんは？」

「歩美はねえ、コナンくんが元気に頑張ってくれますようにって」

一気に静かになった。

「歩美ね。何となくもうコナンくんには会えないような気がするの。
でもね？ ずーっと元気でいてほしいって今でも思ってるから。ど
こにいても」

真剣で、でもやっぱりどこか悲しそうな歩美の側に、灰原が近寄
って、

「……そうね」

とだけ言って、微笑んだ。その時。

「よっしゃー！ 決まったで！ あの時の中坊に勝つ！ これで決まりや！」

平次の声が静かな工藤邸に響いた。

「……平次。もうちょっと空気読もうよ」
「は？」

「今、歩美ちゃんの願いを聞いてたんだよ。いい話だったのに、平次のせいで空気ぶち壊れちゃった」

「あ、そらスマン」

あはは、と笑いが広がる。

「平次、あの時の中坊……ってスキーん時の？」

「せや。探偵やとつたら会える思ってたのに、アイツ姿現しよらへん。ええ探偵になつとる思うねんけどなあ」

「スキーつてもしかして……新一じゃない!？」

「そうだろうな。前に服部から聞いたときもそう思ったし」

「……………は？」

「え、工藤くんやったん!？」

「そうだと思うぜ？ あの時解決はしたけど、あれはどっちの事件でもねえよ」

「どういうことや？」

眉をひそめ、思わず声が低くなる平次に、

「オメエは親父さんにヒント聞いたんだろ？ オレもだから」

サラッと新一は言い返した。

「え、工藤くんのおっちゃんも来てはったん!？」

「ああ、姿は見てねえけど、あの夫婦は揃って来てたろうな」

心なしか遠くを見ているような新一はお構い無しに、蘭と和葉は盛り上がる。

「でもビックリだね！ 和葉ちゃんたちもいたなんて！」

「なあ！ すごい偶然やんな」

すると、それを聞いていた青子は思いついたのか、短冊に願いを書き始めた。一方、

「んなアホなーーーー！！ 何で教えてくれへんかったんや、あの時に！」

「オメエ、聞く耳持たなかったじゃねえか」

大絶叫の平次に、快斗がとどめの一言。

「平次、新一に勝ったと思える日は来んの？」

何せ、色んな意味で最強だからなあ……と心の中で付け加える。

「うつさいわボケ！ 絶対負けへん！ 工藤は何て書いたんや!？」

「ん？ ああ、いっぱい本が読めるようにって」

「……さよか」

「なんか、予想通りというか期待はずれというか……」

「いつもと変わらないじゃないの」

「まあ工藤くんやしな。はよ飾ってパーティーしよ」

新一の願い事に冷めた反応を返す一同。

「あ、青子ちゃんは？」

「エヘヘー、秘密だよ」

嬉しそうに言う青子だが、

「んなもん、飾ったら見えるだろ」

快斗の言つとおりである。

「うん、でも口には出したくないの」

「ま、ええんちゃう？」

「早く飾ろうぜ。腹減った」

それぞれ短冊を思い思いの場所に飾る。1番上に誰が飾るか、平次と快斗と元太の間で一悶着あったのは、ご愛嬌だ。結局、ジャンケンで元太が飾ることとなった。

「早く食おうぜ」

「うん、今から準備するからちょっと待ってね」

「歩美、お腹ペコペコ」

「僕もです！」

窓際に飾られた笹から離れ、リビングのテーブルへ向かう途中、青子はふと立ち止まり振り返った。笹の下の方に飾られた控えめな願い。でも、1番叶ってほしい願い。

「青子、何してんだよ？」

「何でもない！」

そう言って、軽い足取りで快斗の後に続いた。

これから先、たくさんの偶然が必然に変わりますように。 青子

いつの間にか雲は晴れ、星が夜空に輝いていた。

星に願いを（後書き）

【どうしてか異常な長さに……】

みなさま、こんにちは。ペロコです。本日は七夕〜、みなさまのところは晴れでしょうか？ 星は見えますでしょうか？

前回までの話がギャグ要素満点でしたので、七夕というロマンチックなイベントぐらい平和に……と思っていたら、なかなかまとまらず、この長さに。ようやく「ほのぼの」という雰囲気になったと安心しています（笑）

メイン6人+探偵団を出してみました。しかしアレですね。人が多いと、喋らない人が出てくる！ 灰原さんのセリフなんて、数える程しか……。あれ〜？ （笑）うまく振り分けられませんでした。まだまだです。スイマセン。

中学生の話も絡めつつ、今回は平次に叫んでいただきました。今思えば、毎回誰かが叫んでるよ（笑）次は誰に叫ばせようか（爆）

そんな感じで書いた七夕ですが、快斗のトラウマは解消されず、平次は過去の真実を知り、そして次回は……？ 何だろう。イベント的には、9月までないんですよ〜。夏休みの彼らを書きたくなれば、8月辺りに書きます。9月まで無いつて寂しすぎですよ〜？ その頃にはもう少し時間はあるハズだ！ ……多分。

その時は彼らを見て、笑ってやって下さい。（笑うのは決定か？）

では、次に会う時まで。感想はいつでもお待ちしていますv

キッドside2は、もうすぐキリのいいところに！ 長かったー。

これからよろしく願いしますね。

彼らの夏休み - 1 -

暑い暑い8月の東京。

クーラーをしつかり効かせ、エコを訴えるキャンペーンに対して猛烈な抗議をしているかのような場所は工藤邸だ。

家主が暑がりで寒がりなため、常に部屋は快適な温度に設定される。

そんな羨ましい場所に集うは、いつもの6人（家主含む）。いつもは目的があって集まっているのだが、今日は事情が違う。

「あー、やっぱり新一の家って過ごしやす〜」

「オメエら、涼しさを求めてオレの家に来るな！ 人口密度が上がると暑苦しいだろ！」

「んなケチくさいこと言いなや、工藤」

「ケチな男は嫌われるぜ？」

「うっせー！」

女性陣が会話に入らないのは、キッチンにいるからである。

「はい、出来たよ。そうめん」

「さすがに6人分やと多いなー」

「でっかいお鍋にたっぷりだもんね！」

時刻はお昼過ぎ。蘭・和葉・青子が皿たっぷりに盛った、そうめんを持ってリビングへ入ってきた。暑い夏の定番メニューである。

「ようけえあんなー」

「せやる？ 腕だるうなつたもん」

「でもそうめんだと食べれちゃうから不思議だとね」

「こんなに暑いのにな」

「快適な生活を送ってる人が言うことじゃないでしょ、ソレ」

「いただきます」

それぞれ箸を手に取り、めんつゆの入ったお椀を左手に、そうめんの山へ手を伸ばす。しばし、ズルズルとめんを嚼る音がして、沈黙が続く。

10分ほど経って、めんの山も少なくなってきた頃、蘭がポツリと呟いた。

「……何か、思い出作りたいねー」

大学生の夏休み。最も遊び時なこの瞬間に何もすることがなく、こうして工藤邸でそうめんを嚼っている現状に虚しさのようなものを覚える。

「何かって……何するんだよ？」

「えー、例えば……どっかお出かけとかさ」

「この暑いのか？」

暑がりな新一は渋い顔しかない。

「せやけど、大阪に比べたらマシやで？」

「せやせや。大阪は蒸し暑うてしゃあないねんから」

お盆休みを利用して実家の大阪へ帰っていた彼らが言うと、やはり現実味がある。まあ、もともと高校を卒業するまでは住んでいた

場所だから、その経験量も違うのではあるが。

「夏だったら、やっぱり海じゃない？ 青子、この間みんなですつた水着まだ着てないんだよね」

「あ、先週米花デパートで買ったやつ？」

「あー、アタシも着たいなあ、せっかく買ったんやし。蘭ちゃんもそうやる？」

「うん、そうだね！」

始めはボンヤリとしたものだったが、次第に具体性を帯びてきた。
……が。

「暑いじゃねーか」

新一はその一点張りである。

「でも、せっかくの夏休みやねんし、ええかもな。黒羽もそうやる？」

「え、ヤ……。オレ、海は……ちょっと」

「あ？ 何でや？」

そう聞いた平次だったが、すぐにその理由を察したようだ。

気まずい沈黙が漂う中、もう既にそうめんを食べ終えていた新一が徐に立ち上がった。

「新一？ どうしたの？」

「んー、ちょっと探し物」

言いながら、サイドボードの引き出しを次々に開けている。

「黒羽には悪いけど、海もエエなあ……。工藤やったら海辺に別荘みたいなん持ってそうやな」

「お、よく分かったな」

「は？」

「へ？」

「え……」

「確か、父さんが熱海の方にペンション持ってたはずなんだよ。で、鍵が確かこの辺に……。お、あったあった」

「え、冗談で言ったんやけど」

新一以外、驚愕の表情だが、快斗がハッと我に返った。

「ちょっと新一！ さっきまで反対してたのにどーして突然！？」

ここで声色をどこかのお姉さんに変え、

「新一の裏切り者！」

と叫んだ。

「その声やメロ。おもしれーじゃねえか。快斗を海に連れて行ったらどうなるのか。これ以上楽しいことなんてあるか！」

「えー……」

ショックで口がポカンと開いた快斗を放置して、新一はみんなの前に座り、テーブルに鍵を置く。

「し、新一……？　いくら何でも突然私たちが使うのはちょっと……」

「んなもん気にすんな。どうせ、いっぱいあるうちの1つだし」

「はー、やっぱり工藤くんってすごいね！」

「ただ、しばらく使ってたから掃除頼まないといけないし、今すぐってわけにはいかねーけど。……そうだな。20日ぐらいには行けるんじゃないかな」

一応忠告しておくが、新一に自慢している気は全くない。だからこそ、タチが悪いのだが。とりあえず、快斗の意思など新一の中にはカケラも無い。もちろん『行かない』という選択肢が与えられているわけでもなく。

新一がここまで自ら動くのは、もちろん『快斗へのイヤガラセ』以外の何でもない。

「楽しみだなあ……。あ、ちゃんと準備しとけよ？　1泊するんだから」

そう言いながらこれ以上ない程にこやかに微笑んだ新一は、その笑顔を見た者を凍らせたとは知らず、1人心から楽しみにしているのだった。

「黒羽くん、本当ゴメン！　あたしが思い出とか言い出さなけりや……」

「ううん、青子が水着とか言って乗っちゃったから！」

「そんなこと言ったら、アタシも同罪や！」

「いや、オレが別荘とかしようもないこと言ってもうたから……」

「いいんだ、みんな。そう思ってくれるだけで。……だって、見て

ごらん？ あんなキレイに笑った新一は誰にも止められないんだから……」

そんな会話が後に交わされて、みんな遠目になっていたことも、もちろん新一は知らない。

彼らの夏休み - 1 - (後書き)

【新一の笑顔ほど怖いものはない】

こんにちは！ ペロコです。

七夕の時に言っていた、夏休み編の彼らです。考え出すと止まらなくて楽しくて、キッドsideよりペンが進みました(笑)

ということで、別名『まずは計画を立てましょう編』でした。リアルタイム更新なので、20日ぐらいに実際に彼らが熱海へ行ったところを投稿します♪

叫ぶという動作が入らなかったのはちょっと心残りだったりしますが、でも大丈夫。どう考えても、次の話で快斗は叫ぶから(笑)：多分。とにかく、魚ネタはこうして今も活用されております。

……ちなみに。

別荘を熱海に持っているかは知りません。ただ、優作さんなら持つてても不思議じゃないという想像の下、書かれたオリジナル設定です。ご了承下さい。

さー！ 彼らの夏はこうしてスタートしました。次回は熱海編。お楽しみに！

だけど、熱海なんて行ったことのないペロコが書きます。そこだけは覚悟？ しといて下さい。

感想などお待ちしておりますーす！

彼らの夏休み - 2 -

8月20日。現在の時刻は午前11時28分。

車に乗った一同は、新一の運転で別荘のある熱海へ向かっていた。先日、いきなり決まったことながらも、新一はハウスキーパーに別荘の掃除を頼み（もちろん買出しもさせておいた）、レンタカーを借りて1泊するための着替えもきちんと準備していた。

当日、工藤邸に全員集まったのは10時。いつもはそんな時間に起きない新一が、10時に集合と指示を出したのには5人全員驚いた。

助手席に蘭、真ん中に和葉と青子、後ろには平次と快斗を乗せた3列シートの車は静岡県に入り、熱海へと向かって順調に走っている。

「着いたら荷物置いて、すぐ泳ごうぜ」

運転しながら新一が話しかける。

「……………そ、そうだね」

その時の5人の心情は、『ああ、着いてすぐ恐ろしいことになるな…………』とシンクロしていた。

お昼ごはんは、某有名ファーストフード店で食べ、そこからさらに15分ほど車を走らせたところに、その別荘があった。

白を基調としていて、茶色のラインが少し入った2階建ての洋風の別荘というよりはペンションと呼んだ方がよさそうな建物。玄関の扉に行くまでに、鉄で作られ蔓で覆われているアーチをくぐり、入り口脇にある駐車スペース（車5台まで収納可）に車を止める。

「……スゴ」

和葉が一言漏らしたが、他のみんなは口は開くものの、言葉は出なかった。

「さ、荷物置いて必要なモノ持ったら海行こうぜ。——あ、部屋どうする？」

中に入りながら言う新一だが、5人の返事はない。

「おい？」

あまりの凄さに固まっているのだ。

ペンションとはいえ、工藤邸に負けない程の広さで、さすがプロが掃除しただけあってピカピカである。ここに住んで生活できさうだ。

「……へ！？ あ、部屋。部屋ね！ 男3、女3でいいんじゃないかな？」

「っていつか、そんなに寝れるんか？」

「ああ、ベッドは部屋に3つまであるし大丈夫だぜ？」

「……ちなみに新一。そのベッドが3つもある部屋が、このペンシ

ヨンにいくつぐらい……」

「あー、そんなにねえだろ。5つか6つぐらいじゃなかったかな」
「……………あ、そ」

工藤優作所有のペンションだけあって、締め切り前になるとここに閉じこもって原稿を書いたりするため、出版社の人も泊まることもあるから、新一にとってはこれぐらい部屋があることは全く不思議ではない。

『ありえない』と顔一面に書いてある快斗に、新一は首をかしげつつ宣言した。

「さあ！ 部屋も決まったことだし、早く荷物置いて行こうぜ！
な、快斗」

「うああああ」

そんなこんなで歩いて10分ぐらいのところにある海へ到着した一行。パラソルを建て、シートを敷いて準備万端である。さすがに大賑わいのため、順番にトイレで着替えてくることになった。まずは、男3人。

それぞれに溺愛している彼女を置いていくのはかなり気がかりだったが、溺愛しているものの同時に頭も上がらない彼女に押し切られ、猛ダッシュで着替えてくることになった。

その頃、女性陣たちは……。

新一たちが姿を消した瞬間集まってくる邪な視線に全く気付かず、仲良く会話していた。

「アカンな、目が本気^{マジ}やで、工藤くん。蘭ちゃん、止められへん？」
「さすがに快斗も身の危険を感じてると思うんだけど……」
「うーん……新一、昔から気に入ったことには突っ走る人だったから……」

「蘭ちゃんしか頼りになる人はいないの！ 快斗、本当に死んじやう！」

「って言われても……」

——中身は少々問題アリだが。

そしてそんな会話に割り込んできた無謀な男が3人、ナンパしてきた。——それが自らの命を危険にさらしているとは、この時の彼らはもちろん気付いていない。

「ねーねー、彼女。あっちにある海の家でかき氷でも食べない？」

「奢ってあげるからさ！」

……古い。誘い文句が古すぎる。

「あ、でもアタシら人待ってるし……」

「人って彼氏？ いいじゃん、ほっといたら！」

「そーそー。彼女ほつたらかす人なんかよりオレらの方が断然いいって！」

「あの、でも……」

「いーから、いーから」

そう言って、男の1人が蘭に手をかけたその瞬間。

「いーい度胸だなあ、テメエら」

男の背後からマイナス40度の声がかけられた。ピタリと止まる男の動きに構わず、殺気を撒き散らす3人分の足音が男の背後に迫る。

ギギギと音がするような動きで振り返った男達は見た。……見てしまった。そして同時に悟った。『ああ、オレらは手を出してはいけない人に手を出した』と。

目の前にはビーチボールを脇に抱えた（おそらく）声をかけた人物を中心に、向かって右側に色黒の男、左側に中心の男と似た顔立ちの男が立っている。背後にはブリザードが吹き荒れているように見えるのは気のせいではない。ビーチボールすら凶器に見える。

「10秒だけ弁解聞いたるわ」

「ま、それで許すことはないけどね」

軽い調子で言われているが、死刑宣告であることには違いない。10秒間、男達は固まったままだった。

「よし、10秒終わり。さあ、今すぐこの場から消えてもらおうか」

そう言う新一を含めた3人は、男への怒りと同時に後悔もしていた。どうして、こうなることを予想していながら押し切られてしまったのか。女同士の話があると言われたら頷くしかなくて。でも、頷いてしまった自分が情けない。

「スイマセンでした！」とか「ギヤアアア」とか色々叫びながら、男達は一斉に逃げた。それを睨みつけるように見ながら、周囲の男共を牽制することも忘れない3人の物騒な男たち。

黒の組織を壊滅へと導いた日本警察の救世主と、過去、大阪府警

の強者を1人で倒した本部長の息子と、連日悪質な組織を相手にしていた、元シークレットナンバー付き怪盗の睨みは強烈で、周囲から男の影は消えてなくなつた。

「蘭！ 何もされてないか？！」

「え？」

「平次、早かつてんな……」

「は？」

「快斗も。もつとゆっくりしてたらよかつたのに」

「……はあ」

遅いぐらいです、とは心の声である。

「あたしたちも着替えてくるね」

「荷物ちゃんと見といてやー」

言い残して女性陣も着替えに向かった。

「お互い大変だな」

「そうやな」

「何か、天然というか分かってないというか……」

3人揃って吐いたタメ息は、幸せが逃げても自分で捕まえに行く男たちだったため、やけに様になっていた。

待つこと15分、彼女たちが戻ってきた。3人とも上からパーカーを羽織っている。蘭は水色の水着だ。和葉はピンク、青子はオレンジ色で、それぞれよく似合っている。スタイルがいい分、水着を着ても映えるのだ。もちろん、男共は彼女の水着姿に釘付けとなり、

固まっている。

「新一……どうかな？」

「え、ああ似合ってたんじゃないの？」

「本当!？」

「和葉も似合うとるやないか。やっぱり予想通りピンクやったな」

「アンタ何言うてんの？」

「和葉の水着の色予想しとったんや」

「青子も似合ってたな」

「ありがとう!！」

「まさに馬子にも衣装の見本だな」

「……ちよっと、どついう意味よ!？」

「早く泳ごうぜ。ずっと砂浜にいんのも暑いし」

「黒羽、ファイトやで」

新一の一言で現実に戻されたかのように固まった快斗に、平次がこっそり声をかけた。

「さあ来い快斗! ——あ、蘭たちのこと頼むぜ服部。オレはコイツで遊んでくるから」

「お、おお」

「新一……」

「ん? ああ、そんな心配そつな顔すんなって。手加減すつから」

「快斗! ……が、がんばって」

新一が快斗を引きずって行くのを見送るしかできなかった。

「どうする? これから」

「工藤の気が済むまではとりあえず手え出すことは出来ひんから

なあ。こっちはこっちで遊んでよか」

「せやったらビーチバレーでもせえへん？　ちようど4人やし」

「そうだね！　そうしておかないと快斗のこと気になっちゃうし」

「青子ちゃん、いいの？　黒羽くんのこと放っておいて」

「大丈夫だよ。快斗の魚嫌いは今に始まったことじゃないし、青子もいっぱいイジメたことあるから。工藤くんも手加減するって言うてたし、いざとなったら快斗も必死で逃げると思う」

「逃げることに関しちゃうプロやからなあ」

「そら言えてる。ほな行こ！」

快斗の身を案じつつも、ほのぼのとした空気が漂うこちら側とは対照的に、新一・快斗サイドは殺伐とした雰囲気を感じつつもしていなかった。

「ホラ、海へザバーンと飛び込め！」

「やーめーてー！　お願いだから！　頼むから！」

「お願いも頼みも聞かねえ！！　オラ、行け！！」

と、蹴りを繰り出す新一に、頭のどこかでプチンと音がした快斗は、妙なスイッチが入った。

「……フツ。フツフツ。名探偵、その程度の蹴りぐらい簡単にかかせますよ？」

「何！？　まあ『お前』でも背後に海じゃ逃げらんねえだろ」

「甘いですよ名探偵。私を誰だと思っているのです？」

「その格好じゃ小道具なんて仕掛ける場所ねえだろ。いわば袋のねずみだ」

確かに、水着では仕込む場所がない。――が。

「いいえ。その袋には大きな穴が開いているんですよ」

そう言うや否や、真横に走り出した快斗。……確かに海には入っていない。

「あ！ 汚ねえぞ！」

「逃げるのが私の仕事ですからー」

そして、いつしか事態は鬼ごっこへと変わり、疲れた2人がパラソルの下で肩で息をするのは、今から2時間後のことになる。

もちろん、似た容姿の2人が殺伐とした空気を飛ばしながら走り回る姿は、かなり注目を浴びていたが、同伴者4名は我関せずで、ずっとビーチバレーをしていた。なかなかの根性である。

その夜、女性陣が腕をふるった料理には魚の影は全く見えなかったことから、僅かながらも気にしていたことが感じられ、快斗は救われたとか。

とにもかくにも、大騒ぎだった熱海での1日目はこうして幕を閉じた。

彼らの夏休み - 2 - (後書き)

【探偵と怪盗の戦い……？】

こんにちは！ ペロコです。熱海1日目はとりあえず終了です！。

お約束通り、熱海編。別名『新一の豪遊編』（笑）彼はセレブです。オレ様セレブです。……最もタチが悪い。

何だか、原作の彼とは違うように見えるかもしれませんが、これはこれで新鮮で楽しいです。周りにいるみんなも、原作よりも淡泊な感じですよ。

まず書きたかったのが、ナンパ撃退のシーンだったんです。どーしても鋭い睨みを利かせる彼氏な3人を書きたかったんで、とっても満足してます♪

もう1つは、女性陣の気遣いです（笑）いつもいつもやられていては、さすがに快斗も可哀想かな、と。なので、一応今回は快斗の逃げ勝ち（？）です。こんなペロコはこれでも快斗ファンです。見えなくてもそうなんです（笑）

実は今回、彼女たちの水着の詳細を書いていません。色だけ描写です。どんな水着かは、皆様のご想像にお任せします（爆）

では、熱海2日目の彼ら、明日のお話もお楽しみに♪（まだ完成してませんが、大枠は大丈夫です！）

感想もお待ちしてます！！

彼らの夏休み - 3 -

8月21日。熱海に来て2日目の彼らは、優作氏所有のペンションに備えられたフカフカのベッドで目覚めた。

実は昨夜、ご飯を食べた後で和葉が持ってきていた花火をやって、もう一盛り上がりしていたのである。

快斗が海に入らなかったことが新一の希望に副^そえなかったこともあり、ずっと不機嫌だったのだ。まあ、新一としては、快斗が海に入ったらどうなるのかを見たくて、わざわざ熱海まで来たんだという思いが強く、目標達成出来なかったのが非常に悔しかったのである。

快斗からすれば、『毎回毎回やられてたまるか!』といった感じなのだが。

そして、不機嫌なまま花火に連れられた新一は、花火を持った蘭に一言だけ言われて機嫌が直ったというのだから、現金なものである。その一言とは……

「新一、一緒に旅行に来てくれてありがとう。新一がいなかったら熱海に来ることもなかったしね。いい夏の思い出ができたよ」

である。

そうは言っても、実際の新一は、快斗を海に入れることに躍起になっており、蘭との思い出といわれても大してないのだが。彼女の言葉は絶大で、それだけで機嫌も直れば安いものである。

もちろん、花火に照らされた蘭の横顔が綺麗に微笑んだその顔に、新一はコロッとやられただけに過ぎない。

こうして、全員心地よい眠りに着いて、明けた熱海2日目。

色々な意味で疲れていた男性陣は、

「工藤くん、服部くん、快斗？ 朝ごはんできたよー」

という青子のドア越しの声が聞こえるまで、ぐっすり寝ていた。

「んあ？」

「朝か？」

「ヤベー、寝すぎた」

「今何時？」

「……9時半や」

「ゲッ。寝すぎじゃね！？」

「早く起きねえと！」

口々に言いながらドタバタと準備を終えて、2Fの寝室（という名の客間）から1Fのリビング（という名の大広間）へやってくるまで、約5分。上出来である。

「悪い！ 寝坊した！」

「いいよ、あたし達も疲れてたみたいで、起きたの30分ぐらい前だったし」

「さすがに腹減ったな」

「工藤くんが買出し頼んどいてくれたおかげで、食材には困らへんし、楽やわ」

「でも買いすぎだよ、あれは」

「何？ そんなにたくさんあんの？」

「うん。6人分で2回しか食べないのに、どう見ても多すぎて」

「……それで、この量か？」

彼らの目の前には、和洋折衷の朝食が広がっている。ご飯とパンが同じテーブルに並び、味噌汁、コーヒー、ハムエッグ、ほうれん草のおひたしなど……。ちなみに昨晚同様、魚はない。

「少しでも使わないともつたいなくて」

「オレ、こんなに食べねえぞ？」

「大丈夫だよ、工藤くん。快斗が食べるから」

「どーいう意味だ？ それ」

「そのままの意味よ！」

「まあまあ。食べよか」

「そうだね。いただきまーす」

それぞれ席に着き、思い思いにテーブルの上に広がる料理へと手を伸ばす。

「今日はどーすんの？ 何か予定あんの？」

と、快斗がすごい勢いで食べながら聞く。答えたのは、ビックリしながらその様子を見ていた蘭だ。

「あ、今日はお買い物に行きたいねってさっき話してたの」

「お土産買いたいしな」

「せっかく熱海まで来たんだしね」

「ふーん？ まあいいんじゃない？」

パンをちびちび食べながら新一が賛成する。また、ガツガツとご飯をかつ込む平次も、

「エエな！ 次いつまた来れるか分からへんし」

と同意した。

こうして、朝食を取りながら予定を決め、20分後にはテーブルの上の料理は全てなくなっていたのだから大したものである。

そして、そこからさらに30分後に、帰宅できるように準備を整え、行きと同じく車に乗ってペンションを後に出来たのは、もはや奇跡ともいえる。

「どっかデパートとか百貨店とかでもいいかー？ 近くに大きいのがあんだけど」

と言う新一の運転で、デパート5Fの駐車場に車を止める。

「行こ！」

と、彼氏そっちのけで女性陣は半ば駆け足でエスカレーターへと向かう。

「さーて。何分で終わるか賭けへんか？」

「えー？ 全く予想つかないんだけど。あの張り切り方」

「ベンチ探さねえとな」

男性陣は最初から買い物に対して、別に興味もないため、やる気なしである。

こうして、彼らのヒマで退屈な時間はスタートした。降りてきたすぐそこにあつたベンチに座って、早30分。終わる気配など欠片もない。

「あー、ヒマだなあ……」

そう言つて、快斗は徐に何も無いところからトランプを出した。

「どないしたんや、黒羽。トランプなんぞ出して」

「んー、手持ち無沙汰だからさ。動かしかないと、腕もニブるし」

言いながらも、その手が止まることはない。右手から左手へ飛ぶようにカードが移つたと思つたら、その手にはいつの間にか小さな花が乗っており、トランプを持っていた右手には、ケースにきちんと収まつたトランプが握られている。

「相変わらず器用だな」

「んふふ、ありがと」

POM と煙が弾けて、花びらが舞う。

「……少々派手やけどな」

「平次は派手なの嫌い？」

「そういうわけやないんやけど。時と場所うちゅうもんをやなあ……」

だが、平次の小言は続かなかつた。

「あ、あの……」

と声をかけてきた2人組の女性。3人には見覚えがない。

「もしかして、マジシャンの黒羽快斗さん、ですか？」

どうやら快斗を知っているらしい。快斗が頷くと、堰を切ったように主張し始めた。

「私達、この間名古屋でやったショー見たんです！」

「すごく感動しました！」

「応援してるので頑張ってください！」

そこまで聞いて、快斗はすくつと立ち上がり、女性2人の足元に跪く。首を傾げる2人に構わず、両手を2人の前に片方ずつ差し出し、指をパチンと鳴らすと、生花のバラの花が両手に1輪ずつ現れた。もちろん、トゲはきちんと抜いてある。

「これからも私の側にいて応援してほしいお二方に捧げます」

怪盗のときの口調と重なっていると気付いているのは、白けた目でその光景を眺める探偵2人である。

「……相変わらずキザなやつだなー」

「くっそ、こんな目の前でやってんのに、タネ分かんねえ！」

平次は自分の右隣に座る新一に目を向け、ポツリと言。

「……相変わらず負けず嫌いなやつだなー」

いいコンビである。

女性2人は、顔を真っ赤にしてそのバラを受け取った。

「おい、黒羽。あんまし派手なことばっかやってたら人が集まる……
…つてもう遅かったな」

「さつき花びらが舞ったときに結構人集まったぞ？」

実は3人と2人の女性の周りには、小さな子供、その親、興味津々の表情を隠そうとしない人、遠目ながらもこちらを窺ってる人など、たくさんいたりするのだ。

「あちゃー、んなことなったら……」

「よしっ！ それでは即席ではありますが、黒羽快斗のショーをとくにご覧あれ！」

「……やっぱり」

探偵2人はタメ息の数が増えた。

かくして、『即席！ 黒羽快斗の出張マジックショー in 熱海』は幕を開けた。その内容は、即席とは思えないほど手の込んだものも多く、大勢の観客を魅了した。

そして、それを離れたところから眺めていた女性陣は、

「青子ちゃん、いいの？ あんなサービス以上な感じで跪いて」

「なんか、アタシ鳥肌たってんけど」

「いいんだ。快斗、マジックが本当に好きだし、ファンは大切にしたいっていつも言ってるから。何より、青子が快斗のマジック大好

きだもん」

「……そう」

などと、軽く惚気られたらしい会話を交わしていたと、蘭と和葉は後にそれぞれ彼氏に伝えている。

こうして、当初の目的とは大きくかけ離れた6人の熱海旅行は快斗のマジックショーで終わった。だが、蘭の『思い出作り』という目的は、ある意味達成されたことにはなったので、新一はそれで満足だったらしい。

彼らの夏休み - 3 - (後書き)

【夏休み編、終了ー♪】

こんにちは、ペロコです。ようやく、熱海終わりました。長かった。つきつきりです。1話ずつも長いですし。書き出すと止まらなくて、収まらないんですよ。スゲー。

実は、最初考えていたのは、新一たちも買い物に付き合うという設定だったんです。探偵団や警部などにお土産買ったために。それで疲れて休んでたら声をかけられるという流れでした。でも無理でした。長すぎる。

ということで、大幅カット。そしてなぜか快斗のマジックショーへと変貌いたしました。(最初は花を出すぐらいでショーまではいかないつもりでした)

話しかけられる快斗と、それを見ていた彼女というのは書きたかったトコロだったので書いてよかったです。

そして、ずーっとほったらかしのキッドsideですが……。予測できると思うんですが、全く進んでいません。8月中にあと2話ぐらいが目標ですけど、実現率は40%です(笑)が、がんばります！

ではでは、感想待っています。楽しんでもらえたんですね……？
今回は快斗をあんまり苛めてないんですが。

月夜（前書き）

昨年の中秋の名月記念小嘶「月下の奇術師」からのピミョーなりンクあり。

読んでからだとなお楽しめるか、と。

月夜

ピンポン。

工藤邸に來客を告げるベルが響いたのは、すっかり日も暮れた夜8時のことだった。

訪ねてきたその人は、工藤邸に明かりが灯っていることから、中から人の気配がすることからも、家主は在宅していると判断したのだが……。

ドアが開く気配は無い。

「あれ？」

首を傾げながら、再度ピンポンを鳴らすが、やはり反応は無い。

「おつかしいなあ……」

呟きながらドアを押してみると——開いた。

「不用心だなあ、もう」

ブツブツと小言を言いながら、電気の点いているリビングへと勝手に上がらせてもらう。

「新一い？ 不用心だよ、鍵開けっ放しじゃ……って、どうしたの？」

やはり家主は在宅だった。だが、様子がおかしい。固まったようにソファに座り、身動き一つしないのだ。

「おい？」

新一の前へと回りこみ、顔の前で手を振ってみると、

「……………快斗、か？」

ようやく反応があった。

訪ねてきた人——快斗は、反応があったことに、ホッと安心する。

「そっだよ」

そう言っ、広いソファの真ん中に座ったままの新一の左隣に座った。だが、何も言わない。こういうときの新一は、無理に聞き出そうとすると、『大丈夫』と『何でもねえ』の一言で返してしまいがちになる。どう見ても、大丈夫でないことは一目瞭然にも関わらず、だ。

自分から言い出すのを待つしかない。快斗は知っていた。

そして、そのまま何をするでもなく並んで座ってから20分ぐらい経った頃、ようやく新一は口を開いた。

「今日、さ。呼び出しがあったんだ」

「うん」

「事件そのものは、怨恨による殺害で、思ったより時間がかかるってことはなかったんだ」

「……………うん」

「推理して……………で、犯人が分かって警察に連れて行こうとした時

に、言われた」

「……何て？」

「……『この人がいなくなつて、みんな感謝してるのに、私は責められないといけないの！？』って」

「……………」

「被害者は、その辺りで夜中に仲間と一緒に騒いでたヤツで、みんな被害者がいなくなつて安心してた」

「そう……」

「責められるべきだと思つたオレは冷たい人間なのか？」

ポツリポツリと少しずつ語る新一は、いつもと雰囲気が違う。その目は暗く翳^{かげ}り、いつもの輝きがない。心が傷つけられた新一の問いに対して、快斗は少しの間、黙っていた。——そして。

「感謝してる人がたとえ多かったとしても、それでも新一は真実を見つけただけなんだよ。責める、責めないの問題じゃないんだ。新一は、色んな状況や証拠から1人の人を導き出したに過ぎないんだから」

「それが責められる原因を作つたってことだろ？」

「そういうことじゃなくつて。その怒りの方向を新一に向けるのが間違つてるんだよ。完全な逆恨みじゃないか。新一は『真実を見つけた』だけで、『犯人を責める』ってことをしてるわけじゃないんだから」

大変だつたね、とか、元気出しなよと言うわけではない。的確に新一を暗い海の底のようなところから救い出すべく放たれた快斗の言葉は、わずかながらも新一を救いだした。

少し、今の状況を思い出したようだ。かすかに目に輝きが戻っている。

「サンキュ、ちょっと気にしすぎてたみてえ。——そういや、どうしたんだよ？　こんな時間に珍しいな。何か用か？」

と、ようやく快斗の訪問の理由を聞く。

「うん……。ねえ、新一。今日が何の日か知ってる？」

「今日？　えー……。っと。何だ？」

「中秋の名月、だよ。覚えてる？」

答えを言つとピンと来たのか、新一の顔がニヤリと笑う。

「ああ、覚えてるぜ？　怪盗さんよお」

「光荣ですよ、名探偵」

快斗がまだ白い姿で夜を翔けていた昨年の今頃だった。

「あの時はカツコよく“月下の奇術師を表現したくなった”なんて言っていましたけど……。単純に焦っていたんですよ」

もう今は現れることのない怪盗の気配を出しながら、懐かしむように語りだした。

「見つからないパンドラ、しつこい組織、騙していることの罪悪感……。マジックに逃げ出したんですよ」

「そこにオレが来たってことか」
「ええ。驚いたと同時に、嬉しかったです。名探偵に褒めてもらえたことが私を救い出してくれた」

「大げさだな。オレだって今日フォローしてくれたじゃねえか。弱々しいとこ見せちまったな」

「それは、『オレ』からのお返し。それから……」

スツと立ち上がり新一の前に立つ快斗は、目の前の彼をじっと見つめる。

「今からが『私』からのお返しです」

バサリと新一の視界が白で覆われた。そして、それがなくなったとき、目の前には怪盗キッドが立っていた。リビングの明かりも消えている。工藤邸の大きな窓から満月の灯りが差し込んでいた。

「え……」

ビックリして何も言えない新一に軽く微笑をもらして、キッドは言った。

「I'll show you miracle!」

——奇跡をご覧ください——

それから1時間ほど怪盗のマジックは続いた。工藤邸の大きな窓から差し込む月光を背後からのライトとして……。

——そして。

「で、本当の目的は何だ」

「やだなあ、もう。言っただじゃん、お礼だって」

「他にもあんだろ？ それだけのためにわざわざオレの家に来るか？」

「まああることはあるんだけど……それが1番の目的は本当にお礼なんだってば。あとは……月見酒でもいかがかなーって思って」

「お前そんなものどこにも……」

P O M

「……どっから出した？」

「企業秘密です」

「ご丁寧に手作り月見団子と日本酒を持参していたようだ。」

かくして、元怪盗と名探偵の月見は行われることになった。

いつもと少し違う、しんみりとした雰囲気綺麗な月夜のこと。

「あ、上手い」

「でしょー？ 自信作なんだよ！ 出来立てだとなお美味！」

「怪盗キッドがエプロン着けて月見団子……」

「ちよっと！ あの格好でエプロンなんてしてないよ!？」

……いつもと変わらないのかもしれない。

月夜（後書き）

【たまにはこの2人だけで……】

こんにちは、ペロコです。中秋の名月、ということで「メモリアルデー」更新でございます。

昨年の中秋の名月記念小嘶ネタを引っ張ってみました。裏側も分かったのではないかと。

今までの「メモリアルデー」とはまた違う感じにしてみました。コメディ性は0です、ほぼ。深刻な話を書くのは苦手なので、これがいっぱいいいです（笑）秋なんだから、少しぐらい寂しさや侘しさをみたいなのを作ってみたかったです。1度だけでいいんで（笑）

快斗と新一の組み合わせはやっぱ書きやすいです。こういう時、「あー、好きなんだなあ」って自分で自覚します。（普段の扱いがアレじゃね……）「2人でしみりと月見酒を『静かに』味わう」がテーマだったんですが……やっぱ、「フツ」と鼻で笑う程度でいいからオチをつけたいくなるのは、関西人のサガなのか、はたまた単にそういうタイプが書けないからなのか……。

とにもかくにも、次はハロウィンですね。どーしよーかな。また探偵団でも出してみますか？ 誰かネタ下さい。本当に困ってます。というか、パターンが同じになりそうなので。昨年は快斗に「怪盗」を「仮装」と言わせて満足しちゃったから（笑）

では、感想をいただけたら嬉しいです。

……最後に。お酒は二十歳になってから、ですよ（笑）

イタズラ

青子はドキドキしていた。何て言うか、どう思うか……。もしかしたら、怒られるかもしれない。けれど、青子は決めたのだ。

いつもいつも驚かされるのは自分ばかり。1度くらい、こっちが驚かせてみたいではないか。

「よしっ！ 準備OK！」

向かう先は、ずっと昔から馴染んできた幼なじみの快斗の家である。

緊張で震える手をぎゅっと握り締めてから、青子は自分の部屋のドアを開けた――。

10月31日、ハロウィンと呼ばれる欧米文化の日である。日本に伝わって大分と経つが、その名前程度の知識だけで、本来の“ハロウィン”のイベントを行うところは日本では無いのではないか。特に近年では、子供だけで夜道を歩くのは危険だからなおさらだ。

だから、ハロウィンと言っても、店頭にあの怖い笑みを浮かべたかぼちゃが並ぶ程度なのである。

すっかり日も暮れて、少し肌寒くなった道を歩く。とはいっても、大した距離ではないのだが。

青子は今から数分後に訪れるであろう未来に、再び思いを馳せていた。

快斗には「行くから家にいて」と伝えてある。まず、快斗は何て言うか。きっと、

「何の用だよ、青子」

と言いながら、玄関のドアを開けてくれると思う。それから……その後は分らない。何回考えても想像できなかった。いつだって快斗は、青子の予想や期待をいい意味でも悪い意味でも裏切るのだから。

そんなことを考えているうちに、とうとう到着してしまった。深呼吸を2回する。

ピンポン。

人差し指でベルを1回鳴らし、青子はドキドキしながら待った。

ガチャとドアが開いて、

「まったく、何の用なんだよ、青……子？」

青子の予想通り、文句を言いながら出てきた快斗の目が丸くなっ

た。

家の玄関からの明かりで照らされた青子の姿は真っ白だった。それは快斗に最も見覚えがあつて……いや、見覚えどころか自分が封印したはずの姿。

「トリックオアトリート！ ……ってこんな姿で言ってもね」
「なん、で……？」

未だ茫然としている快斗だったが、ハッと気を取り直し、

「とりあえずあがれよ」

と玄関への道を開けた。

——そして。

「で、どういうことだ？」

快斗の部屋へ来て、ベッドへと腰掛けた快斗に、青子は問われた。

「どういつって……ハロウィン」
「それは分かる。あ、トリート、な。ホラよ」

POM と何も無い空間から飴玉が出てきたのは、さすがである。いつも仕込んでいるのか……それとも単に甘党だから持ち歩いているのを出したただけなのかは定かではない。

「やっぱり怒ってる……よね。ゴメンね、勝手にこんなことして」「や、怒ってるわけじゃねえし」

しょんぼりと謝る青子に、慌てて快斗はフォローする。

「単純に理由聞きてえだけ」

あれほど、この姿で夜を翔ける姿が嫌いだったはずの青子が、どうして“仮装”でこの『怪盗キッド』を選んだのか、IQ400の頭脳を持つてしても分からない。

そんな快斗の心の内を知ってか知らずか、

「うん……青子、確かにキッドは嫌いだったよ」

率直に青子は語りだした。

もう止めたとはいえ、面と向かって言われるとグサリと来るな、などと快斗は思ったのだが、でもね、と青子は続けた。

「それはお父さんをバカにしていたから。——けどそれは、結果的にお父さんが毎日元気に過ごすことでもあったし……何より、キッドのマジックは青子も好きだったから」

初めて語る自分の心。につこり微笑んで、青子は続けた。

「快斗のマジックみたいにあつたかいんだもん」
「……………」

快斗は思わず黙ってしまふ。まさか、こんなことが聞けるなんて思ってもみなくて。

「その服、どうしたんだ？」

だから照れを隠すためにも話をそらして、実はずっと気になっていたことを聞いた。自分が着ていたものは封印してあるはずだ。

「うん……できるだけ似たのを探したんだ。結構色んな服屋さん行ったよ。夏に熱海に行った時に、この白のジャケット見つけたの。夏物だから薄いんだけど、下に青いシャツ着るからいつかって。——でもシルクハットとモノクルは見つからなくて……」

「それでそんなに中途半端なのか」

髪の毛も両目も見える青子キッドに、苦笑を漏らす。

「エヘヘ……………」

「あーあ、ビックリしたぜ？ ドア開けたら白い人が立ってたんだから」

「じゃあサプライズ成功だね！」

「そーだな」

ベッドに座っていた快斗が、ふと立ち上がり、机の引き出しを開けた。

「どうしたの？」

中に入っていたのは、鍵の付いた小さなケース。どこからともなく鍵を取り出し、ケースを開ける。

そこに入っていたのは――

「それ……」

チャリと音を立てて現れたのは、キッドのモノクルだった。

クスツと笑いながら右目へと付け、振り返った。

「Trick or……treat?」

今は現れない怪盗の気配を出して。

「キッド……」

モノクルしか付けていないのに、その雰囲気は快斗とは全く違う。

立ち振る舞いは、繊細で洗練された怪盗紳士そのものであり、言葉遣いは同じ声でもいつもより柔らかい。

「お菓子をくれなきゃ、”イタズラ”しちやいますよ?」

「あ……」

まさか自分が聞かれるとは思っておらず、何の準備もしていなかった。

「無い、や。どうしよう……」

「それではイタズラ、ですね」

微笑を浮かべながら近づくキッドに、青子は思わず目をぎゅっと瞑った。

直後訪れたのは、右頬への甘い甘い、イタズラ——。

イタズラ（後書き）

【ハッピーハロウィン！】

こんにちは！ お久しぶりです。ペロコでございます。最近多忙なため、『キッドside2』ですら更新できず、申し訳アリマセン！
来月は何とか頑張ってみるつもりです。

さて、ハロウィン話。先月の中秋の名月の後に、いくつかご意見をいただきました。ありがとうございました。……が！ そのどれとも違うという事態に……（汗）どうも、皆様『賑やかなのが読みたい』とか『オールキャラで』などと仰っていたのですが……。そこまで多くの人を書ける自信は皆無でして。申し訳ないです。そして、甘い方向へと脳内は働き始めました。

書きたかったのは、モノクルだけのキッドです。本当は、青子ちゃんからモノクルを取って、自分に付ける……ってしたかったんですが、そのモノクルはどっから手に入れた！？ ということが決められず、不完全キッドで快斗の元へと向かうことに。
ちらりと熱海ネタを出してみたり（笑）

モノクルを快斗が付けた辺りから、快斗の背後にキッドの姿が重なったらいいなと思います。皆様の頭の中で。また、久しぶりに純粋な快青を書いて非常に満足です。甘い作品は昨年のクリスマス以来……？ 1年に1回のペースだな、こりや（笑）
オチが無いのも初めてですね。この『メモリアルデー』。

感想などいただけたら嬉しいです！ 次は……クリスマス？ また空くなあ。時間があつたら次は平和など書きたいですね。関西弁書きたい（笑）でも、キッドside優先なんで、どうなるかは未定。

クリスマスも考え出さないと……。

次は大勢がいい、ですね？ ほのぼのコメディで（笑）次で10話目か。長いな。さすが、半年も続けてると溜まりますね！

聖夜

「クリスマスぐらいはさー、大丈夫だと思ってたオレが悪いのか？」

「新一が歩けば、事件に当たるってね。哀ちゃんも言ってたよ」

「ははは。上手いな！ 座布団1枚や」

「笑い事じゃねえだろ」

ボソリと呟いた新一に、平次と快斗は押し黙るしかなかった。

—— どんよりと暗い空気が流れる3人とは裏腹に、世間はクリスマス。そして、そんな3人の周囲もクリスマススムードで甘い雰囲気の流れる東都の街、だった。

『だった』。過去形である。

現在、3人の周囲には（悲しきかな）見慣れてしまった赤い光と、黄色いテープ、強面の男たち……見事なまでに事件現場である。

何度も言うが、今日はクリスマス。3人はそれぞれ（愛する）彼女にプレゼントを購入しに米花デパートへと出かけ、満足のいく品を手に（愛する）彼女が現在準備中の『目一杯楽しもう！ 今夜は飲むぜクリスマスパーティー in 工藤邸』（命名快斗）へと急いで帰る途中だった。

……そして出くわした転落事件の現場。

もうすっかり暗くなりつつある、白昼堂々ならぬ聖夜堂々起きた

事件に遭遇した3人は、遠い目をして呆然とするしかなかった。

今日だけは勘弁、と背を向けた瞬間にかかった馴染みの声に足を止める。

「おおー！ 工藤くんじゃないか！ 今日はどうしたんだね？」

どうしたもこうしたも無いだろう、という突っ込みは心の中だけで済ませて、顔にニツコリと笑顔を貼り付けてから新一は振り返った。

「こんばんは、目暮警部。今日はたまたま通りかかっただけですよ」
「そうだったのか」

（一見）のほほんと会話を交わす2人を見ながら、平次と快斗はひそひそと話をしていた。

「あかん……工藤のやつ、目えが笑つとらん」

「新一、怖すぎ。あんなに笑うと逆に怖い」

「猫かぶつとんなー」

本人には聞かせられない内容である。

すると、そんな2人の視線の先で新一の目つきが『笑ってない笑顔』から『探偵』のそれへと変わった。

「「！」「」」

「服部、快斗。ちょっと寄ってくぞ。オメエらも知恵貸せ」

一体何が新一の気を引いたのか。

「どないしたんや、工藤。自殺やなかったんか？」

「つていうか、警部さんの話聞いただけで分かるもんなの？」

「説明は追々するから。——警部、転落現場へ案内して下さい」

「助かるよ。予定は大丈夫なのかい？」

「ええ」

馬にニンジン、工藤新一に事件。さっきまでの『笑ってない笑顔』とは比べようがないくらい真剣だが、その目は真実を求めてキラキラと輝いている。もう止められない。

2人は早々に諦めて、新一の後ろを着いていった。

「被害者はこのマンションの405号室に住む男性。自殺じゃないって思ったのは……」

「争った跡でもあったとか？」

「いや、それはない。靴がな、片方しか屋上に残ってなかったらしい」

「もう片方は……」

「本人が履いてた」

「それはまた……」

「ああ、おかしすぎんで」

よほどブカブカの靴で自殺する時に躓くようにして落ちたのか？ そんな無茶な。片方は履いたままということは、ブカブカなはずがない。犯人に押されて、片方だけ靴が屋上に残ったまま転落してしまった可能性の方が確実に高い。つまり、自殺の線は薄いことになる。

「だから、今から現場に向かって、とりあえず状況確認からだ」
「……了解」

——それから15分後、現場検証が済んだ3人は、連絡中の警部を屋上に残したまま、ある一室を目指していた。屋上の現場のすぐ真下となる603号室である。

先ほどの現場検証で、屋上に残された靴の位置がおかしいと思っただ3人は、警部に事情を話し、この部屋へとやって来た。

実際は、屋上から落ちたのではなく、この部屋のベランダから突き落とされたと推理したからだ。家主は、被害者の友人で、最近金銭面で被害者とトラブルがあったそうだ。言われてしまえば簡単な事件。屋上の靴が、どうやら混乱を招いたようだ。

その部屋に向かう途中、警部がエレベーターを使って下へと降りたのを確認した快斗は、

「じゃあ、オレはオレで仕事を全うするから」

「は？」

「ちょ、おい快斗！」

嬉々として言い残し、そのまま来た道に戻り始めた。

「何なんや、アイツ……」

「まあ、快斗のことだし、何か考えでもあんだろ。とりあえずは……
…ココか」

ピンポーン。603号室のベルを鳴らす。

「……留守、か？」

「すみませーん、話聞きたいんやけど、ちょっとええかー？」
「すいませ」

ガラッ。ドタンボタン。ガッシャーン！

「ギャアアアッ！！」

……………。

「……………」

「何の音や、今の」

部屋の中から聞こえてきた妙な物音と、あれは、悲鳴？

ドンドン！ とドアを直接叩いて、

「開けてもらえますか！？」

「どないしたんや?！」

と新一と平次は外から叫ぶ。

ガチャと音がして、ドアの鍵が開いたと気づき、ドアを勢いよく開け、中へと飛び込んだ。そして、2人が見た光景は……

「……快、斗?」

快斗の相棒のハトたちが総勢約……30羽ぐらい集まり、壁際にうずくまっている(この部屋の主と思われる)男性を襲っているのを少し離れて見ている快斗の姿だった。

部屋はこれでもかというぐらいに荒れており、手に触れたもの全てを放り投げたのではないかと思われる。コーヒーが入っていたのだろうか、カップが床に落ちて割れており、中身は飛び散っている。椅子は横向きに倒されていて、上に乗っていたであろうクッションは、椅子の位置から遠く離れた和室にまで飛んでいつている。

「あ、新一に平次」

「何、したんだ……?」

「えー? 特に何もしてないよ? 屋上からベランダに降りて、鍵をちょーっと開けさせてもらって中に入ったらさ、ちょーっと暴れたから、オレの相棒たちをちょーっと遊ばせてあげたら、ちょーっとビックリして叫んじゃったみたいだね」

「……」

「……玄関の鍵は?」

「オレが開けたよ?」

ちなみに、今現在快斗が立っている場所は、玄関のドアから約3mは離れた位置である。鍵が開けられたと同時に飛び込んだのであ

るから、普通に玄関まで歩いていたのでは、新一と平次が中に入るとき、今快斗が立っている位置にいることは不可能である。

ということは、つまり……？

「……………」

「……………」

目が怪盗に戻っている快斗は、口元に涼しげな笑みを浮かべて、それはそれは非常に……怖かった。どうやらパーティーの計画を邪魔されたのが嫌だったらしく、罰を与えていたようだ。

ベランダの鍵を開けることも、投げられたものを全て避けるのも、玄関の鍵を遠くから開けるのも、快斗にとっては造作もないこと。さすが、天下の元怪盗。容赦なし。

この時、新一と平次は快斗を敵に回すまいと固く決心した。

——5分後、騒ぎを聞きつけて駆けつけた警部たちが目にしたものは、探偵2人が遠い目をしているのを不思議そうに見ている快斗と、うずくまったままの容疑者の姿だった。ちなみに、ハトたちは影すら残さず消えており、容疑者に残った無数の傷跡があったが、誰一人として（容疑者も含めて）説明しなかった（出来なかった）ので、謎のままになったそうだ。

——そして。

事情聴取から解放された3人は、ダッシュで工藤邸へと走っていた。

「ヤベー、遅くなりすぎた！」

「絶対怒ってんで！」

「あー、もう！ アイツのせいだ！ もう少し天罰を与えておけばよかった！」

口々に文句を言いながら。

警視庁から15分で帰るという快挙を成し遂げた3人は、勢いよく工藤邸のドアを開けると同時に、

「ゴメン！！」

と揃って叫んだ。

すっかりと飾りつけも完了したリビングの中で、3人それぞれの（愛する）彼女からかかった声は、

「お帰りなさい」

の一言だけだった。

「……怒ってねえのか？」

「佐藤刑事から連絡があつたの」

「事件やつたんやって？ お疲れさん」

「快斗たちが事情聴取してる時にずーっと時計見てるから、約束があつたんじゃないの？ って」

どうやら、気を利かせてあらかじめ連絡しておいてくれたらしい。

「すまんかった」

「エエよ、無事に帰って来てくれたわけやし」

「ほら、パーティー始めよ？ 待ちくたびれちゃった！」

こうして、温かく出迎えてくれた（愛する）彼女たちと、天罰を与えてから戻ってきた（最強の）彼氏たちによる『目一杯楽しもう！ 今夜は飲むぜクリスマスパーティー in 工藤邸』は、1時間半ほど遅れてスタートすることになった。

「それじゃあ……」

と、顔を見合わせ、シャンパンの入ったグラスを顔の前に掲げて同時に叫んだ。

「メリークリスマス！！」

工藤邸でのクリスマスは、まだ始まったばかり。

聖夜（後書き）

【当初予定していたのと違うものに……】

みなさま、こんにちは。ペロコです。世間はクリスマス！ ペロコは出不精の寒がりなので外出頻度は極端に下がっております。

さて、お約束の記念日のお話。いかがでしたでしょうか？ 実は、当初予定していたものは、今まで通りパーティーメインにしようと思っていたんですが、何でかなー。こんなことになっちゃいました。初の（ちよつとした）事件も入れてみたり。

ただ、ここで小説を書くようになってから常に言っているように「事件ものは書けません」です。トリックだったり、人物の名前だったり、スルーの方向でお願いします（平伏）はつきり言って辻褄は全く合っていないと思います。というか、考えることが出来ません（爆）なのでメインは『犯人を追いつめる3人（特に元怪盗）』となります。クリスマス話を考える上で思いついたのがなぜかコレで。

にぎやかだったり甘いものを期待されていた方を裏切ってしまったのではないかとビクビクしています。でも、ハロウィンで甘いのはやったし……それ以前で散々遊んだし……とか言い訳してみたり。新一も部屋に入ったときに犯人に攻撃させようとか、逃げ出した犯人を3人で協力して捕まえるとか色々考えてたんですが、うちの快斗が暴走しました。単独行動で、しかも好き勝手に動いちゃいました。どうしてくれんだ！

またの機会にでも、今回書けなかった『3人で協力して』を書きたいです。

色々と快斗が人間離れしておりますが、あくまでペロコの勝手な設

定です。この話における登場人物は、色々と原作とは違います。今更ですが、ご忠告。

初登場の目暮警部と（名前だけ）佐藤さんも出演！ ですがほとんど出番なし。ファンの方、スイマセン。

さて次は……大晦日？ え、早……。もしかしたら元旦かもしれないません。というか、そこは書けないかもしれません。スイマセン。何とか考えてみますが（だって昨年も書いてないし！）、どちらかだけになる可能性が1番高いです。ご了承下さい！。時間がない。出来たら2つ頑張ってみます。

長くなりすぎましたが、最後に……。皆様、メリークリスマス！

行く年来る年

自宅の大掃除を終えて、中森宅の大掃除も毎年のことなので手伝って帰ってきた。現在のオレの疲労度はMAXだ。

いつものことだし、慣れてはいる……と思う。

キッド専任と毎度毎度叫んでいた中森警部の肩の荷も降りてるはずだし、掃除はいつもより楽だったと思う。

だとしたら、この疲れは一体どこからやって来たんだろうか？

……分かん。心当たりが多すぎるってのが悲しいことだな、うんうん。……ん？　もしかして今のオレは、端から見たらものすごく変じゃないか？　いくら自分の部屋とはいえ、ベッドで胡坐かいて、腕を組んで、1人で頷いてるって……もしかしくても変か。

「はあ……」

ゴロンと横になる。

今年は、本当に色んなことがあった。

年明けすぐに、パンドラがようやく見つかり、親父の代から続いていた因縁を断ち切ることが出来た。長い長い対決から解放された

その解放感に浸ったまま、青子の元へと行った。

大きな怪我は無かったものの、それでも傷が無かったわけではないオレの姿に、泣きそうになりながらも、決して涙を流すことなく部屋に上げてくれて、最後まで話を聞いてくれた。

で、告白にOKしてくれて……グへへ。

そっからは、もう毎日が怒涛の勢いで過ぎたな、うん。

入試自体は、オレの実力を持っていたらもちろん問題なく終わったんだけど、入学式で新一の姿を見た時はビビったな。

名簿順で前後に並んだ時は衝撃だった。

この辺では1番有名な学校だし、いてもおかしくないとは思ってた。けど……いきなり振り返って、

「よお、コソ泥さん。元気そうだな」

って言われた時は本気で名探偵が怖くなった。

逃げ切れる相手でも、誤魔化せる相手でもないとは思ってたけど、初対面で見破られるとはさすがに思ってた。なかった。

呆れと諦めが同時に押し寄せてきて、もう隠す気力もなくなって

からのオレの行動は早かった。

「名探偵こそ、お元気そうで何より。——ところで、新一って呼んでいい？」

「……隠さねえんだな。別にいいぜ？ 黒羽快斗さん？」

「新一に隠してもしょうがないでしょ？ 現に既にオレのこと知ってるみたいだし？ オレも快斗でいいよ」

既に名前を知られてたことに改めて怖くなったけど、もともと名探偵には興味あったし、何となく嬉しかった。

衝撃で始まった大学生活は、ハチャメチャで、あっという間で。

誕生日パーティーやってみたり、事件に巻き込まれてみたり、あ、夏には熱海にも行ったんだっけ……。

バカみたいな騒ぎ合いしてると思ったら、真剣に事件の真相を探して。

刺激的でスリリングな、それでいて、どうしようもなく楽しくて幸せな日々。

きっと、その『スリリング』の元凶となった人物は、今頃書斎の掃除に追われているんだろうけど。それとも、彼女が来て2人でやってんのかな？

関西へと帰った2人も、きっとそれぞれ大掃除しては喧嘩してる
ことだろうし……。

青子は今頃、明日の準備でもしてるだろうね。蘭ちゃんと初詣に
行くて、オレほったらかして楽しみにしてたし。

出合いがあれば、別れもあるというけれど。

そんな言葉を吹き飛ばしてしまいそうな人たち。

——楽しい日々をありがとう。来年も……よろしくな？

もちろん！ とみんなの声が聞こえたような気がした。

行く年来る年（後書き）

【快斗一人称♪】

みなさま、こんにちは。ペロコです。毎日寒いですねー。当たり前なんですが。風邪など引いておられませんよね？ 十分にお気をつけ下さい。

さて、クリスマスの時に言っていました『大晦日 or 正月のお話』は、結局大晦日となりました。実は、クリスマスを書いてたときにボンヤリとこんな感じのを思いついておりました。でも、お正月が書けたら、こっちはボツにしようと思ってたんですが……。思いつきませんでした、お正月。残念。

快斗一人称は、もはや書き慣れたものでスラスラと書けました。楽しかった♪

入学式エピソードも入れられたし、よかった。実は書く機会逃してたんですよ……。スッキリしたー！。これで今年やり残したことは無いな、うん。

「もっと詳しく知りたい！」という方がいれば、ペロコまでご一報下さい。大体出来てるんで、書けますよ（笑）本文中のはほんの一部分なので。1人でもいらっしやれば、お披露目。いらっしやらないければ、お蔵入りの方向で（笑）

さてさて、今年もたくさんお世話になりました。連載を2つも書き始めたときは、どうなることかと思いましたが、たくさんたくさんコメントや感想をいただきまして、本当にありがとうございました。励みになりました

次のメモリアルデーは……節分ですね。豆まきか。面白くなりそう

だ（笑）来年は、もう1つ計画してることがあるので、それも個人的に楽しみです。どんな反応来るかな……？ お披露目できる段階になったら、こちらで出しますので。

それでは皆様。よいお年を！ 来年も素晴らしい年になりますように。

ペロコでした！

厄払い

節分。それは、立春の前日のことであり、旧暦で言うところの大晦日のことである。1年の厄を払い、綺麗に新たな年を迎えるための昔からの伝統行事であり、この日の夕暮れには、柊の枝に鰯の頭を刺したものを戸口に立て、炒った大豆をまくという由緒正しき行いのことだ。

そんなわけで……？

場所はやはり工藤邸。そこに響くのは、男3人の声だ。

「よし、今から豆まき対決を行う！」

「何で対決なんや……」

「準備はいいかー!？」

「オー!!」

「何で気合入れなあかんねん……」

大学のテストも昨日で終わり、今日から春休みへと入った。そんなテスト最終日の昨日、快斗と平次を呼び出した新一は、2人に宣言した。それはもう見事に男らしくすっぱりと。

「明日は節分！　ということで、オレの家で豆まきを行いたいと思う！　絶対来いよ」

この時点で強制参加と決まっているところが、新一らしいといえ
ばらしい。

「珍しいね。新一からそんな提案するなんて」

「バー口。節分の豆まきって言やあ、日本の伝統文化じゃねえか！」

「自分の誕生日忘れとるがな」

「うっせー！　もう忘れねえよ！」

というよりも、優秀なその頭脳が忘れるということを許してくれないのだ。

「ま、別にいいよ。特に何も無いしね」

「どうせ断るなんて出来へんねやろ？」

「当たり前だつての！」

そして本日、晴天なり。風が強いので寒く感じるが、暖房のしっかり効いている会場となった工藤邸は快適だ。こうして、冒頭の開
会宣言へと至ったのだが……。

「平次ー、ノリ悪いよ？」

「いや、突っ込むべきポイントをスルーして工藤に着いてく黒羽の方が変やて」

「オメーら、コソコソ話してんじゃねえ！」

新一はソファの上に仁王立ちになり、目の前に並んで立っている快斗と平次に注意を促した。……というより、怒鳴った。

「ハイハイ。じゃ、さっそく始めますか？ 大豆は？」

「おう。たんまりと買い込んでやったぞ。全部で300粒だ」

「は！？ 1人100粒ってことかいな？」

「そういうことだ。ホレ、服部の分」

この時点で既に『豆まき』というものが違う方向に向かい始めていたのに、止められなかった自分を平次は後に——いや、5秒後に後悔することになる。

「オレはコレだ！」

力いっぱい叫び、新一が懷から取り出したものを見たその時に。

それは、どこからどう見ても『銃』だった。

「今日のために博士に特別に開発してもらったんだ」

「工藤ズルイで！ なあ、黒羽！？」

振り返って、快斗の顔を見た平次はさらに後悔した。

「……フツ。フツフツ」

「不気味やし、その笑い方はアカンで」

「新一、いや名探偵。この私がそのことを知らなかったとでも？」
「何ッ?!」

P O M

「じゃーん！ 題しまして、『鳩が豆鉄砲喰らっちゃう銃3号』
! !」

パンパパーンと、どこかで派手な効果音が鳴った気がする。もし
かしたら、自分の頭の中だけなのだろうか？ 苦悩する平次を責め
てはいけない。

「……………」

「お前も同じようなもん持ってるのかよ！」

突っ込むところはそこやないで、工藤……。

もはや、平次に言う力は残されていない。そのため、何事も
なかったかのように話は進む。

「新一自ら豆まきしたいなんて言うの、おかしいと思ったからね。
博士に聞いたら豆まき銃作ってるって言ってたし」

「……ちなみに、何で3号なんや？」

「失敗しちゃってさー。いやあ、参っちゃうよね。豆の威力って凄
いんだもん。方向調整とかもランプとは全然違うし感覚がなか
な掴めなくてね」

「……………」

『そのネーミングセンスはどうなんだ』とか、『新一自ら言い出
してたことから博士に繋がるなんて、どんな思考回路だ。だからI
Q400なんてふざけた数値が出るのか』とか、『昨日から今日ま
での時点で3つも発明品を作ったのか』とか、『ランプと豆を
比べるのはどうなんだ』とか、『そもそも自分も作るってどうなん
だ』とか……。

諸々突っ込みたいところは多々あったが、平次が聞いたのは『
3号』の理由』についてだけであり、新一に至っては、

「博士に口止め頼んどくんだった！」

と後悔しているのだ。もはや、何も言うまい。というより、言え
まい。

「博士の発明家としての能力は認めてるけど、オレだって負けてな
いよ！？」——さあ、名探偵。覚悟はよろしいですか？」

「オレはいつだって大丈夫だぜ？」

「ルールは……相手に多く当てた方が勝ちってことでいい？」

「構わねえよ？ 正直に申告するんだな」

「新一こそ。——では……いざ！」

「「勝負！」」

いつの間に銃に豆を詰めたのか知りたい気もしたが、

「これはお隣に避難決定やな……」

と、唯一の常識人であり突っ込み役の平次が逃げたために、永遠の謎である。

この後、新一vs快斗の豆まき対決が始まったのだが、300発を使い切った時点でお互い1発も相手に当てられず、勝負は引き分けとなった。ちなみに、平次が抜け出したことについては、

「弾が増えるからラッキー」

程度にしか思われていない。

また、使用された工藤邸の至るところに転がっていた豆は快斗の相棒たちが狩り出されて全て食べられたそうだ。

ちなみに。

お隣へと避難した平次は、灰原哀女史との優雅なティータイムを楽しんでいた。完全防音（だと家主から聞いていたはず）の工藤邸から聞こえてくる2人の声を聞きながら。

その声を聞いて、

「また博士に無理させて……。工藤君つてば、覚悟できてるのかしら？」

なんて怪しい笑みを浮かべた（見た目）小学生の姿を見て、

「工藤、ファイトやでー」

と、気の抜けた的外れな応援を平次が送っていたとか。

なお、今回の豆まきによって隣家から迫り来る真っ黒の厄を払えたのかは定かではない。

厄払い（後書き）

【何てバカバカしい……】

こんにちは、ペロコです。今年最初の『メモリアルデー』は、バカ満開の男2人の節分豆まき話でございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ どんどんキャラが崩壊していつてます……。

さて、節分話についてですが。

昨年大晦日の時に、豆まき銃のことは考えてたんですよ。ただ、その前後が全く出来てなかった！ そこが問題だったのに。まあ、ギヤグ要素たつぷりにするのはそのつもりだったんで、予定からは外れておりません。外れたのは、どう考えても新一と快斗のキャラの崩壊レベルだけで（笑）

そして、平次はこの『メモリアルデー』における常識人であり、突っ込み役であり、被害者です。

男3人が書きやすいですね、やっぱり。女の子スキーな方には申し訳ないです。今後もこの3人の組み合わせが多いかもしれないです。そして、灰原女史にも登場願いました！ 彼女は博士に苦勞をかける人に容赦しません。という設定。

……厄、払えたのかなー。（他人事）

さてさて、次は甘い甘いバレンタインですね。今年は何やら、男から女に贈るというスタンスが流行してるというか宣伝されてるようですけど……。ま、今までどおりでいいか。次は女の子も出ますよ！ さすがにねー。

甘い話になると思われますので、今回とのギャップの酷さに引かないでくださいね！？ 大体考え始めてますよー。あと10日じゃね。急がなければ！

では、感想等々お待ちしております♪
これからもよろしく願いますね。

甘い？ 苦い？

甘いものが苦手な新一のために作るバレンタイン用のお菓子作りは、いつだって難しい。

チョコレートは必ずビター、クッキーなどは甘さ控えめでないと新一が困ってしまうのだ。蘭は小さいときから毎年毎年悩み続けていた。

もらったものは、基本的に嬉しそうに受け取ってくれる新一だが、実際は困っているのではないか。出来る限り甘さの少ないお菓子にしているが、お菓子である限り多少の甘さは避けられない。

甘いものをわざわざ食べるような人ではないから、毎年多くの女の子からもらっていて、それをどうするのか困っていたイメージが強い。

大抵のものは、小さい頃から色んな意味で有名だった新一だったので、過激な嫌がらせのために送られてきたものが含まれていたため、処分されていたけれど。

だが、蘭のものだけはいつも照れながらも受け取ってくれていた。

小さな声で「サンキュ」と視線を横にそらしながら言ってくれたのは、確か小学校3年生のとき。

同級生の女の子からの断るのに、蘭からのものを催促したのは中学生のとき。

新一が『厄介な事件』と称して姿を消していた時に作った、ハート型のチョコレートを食べてくれたのは、高校2年のとき。

「あの時は桃型なんて言われたけど……今年直接言えるよね」

去年は『厄介な事件』を解決するために必死に走り回っていて、渡すことも作ることすらもなかった。邪魔をしたくなかった。

ビターチョコレートを使った『ハート型』のチョコレートを綺麗にラッピングする。

「今度は桃型なんて言わせないんだから！」

気合いを入れて自宅を出て、通いなれた工藤邸への道を急ぐ。

玄関の前で大きく深呼吸をしてから、ピンポンを押した。

少しすると、中から足音がしてドアがガチャリと開く。

「何だ、蘭か。勝手に入って来りやいいのに」

「……新一、寝てたの？ 起こしてゴメンね」

「な、何で分かるんだよ!？」

「だって声が寝ぼけてるもん」

「敵わねえなあ、もう。ま、上げれよ」

「うん。お邪魔します」

先を歩く新一に続いて、リビングへと入った。

「紅茶でいいか？ あ、コーヒーがいい？」

「私やるよ、新一。座ってて」

「……そうか。じゃあ、コーヒー頼む」

「うん」

お互いにどこことなく緊張しているのか、やり取りがいつもより少し硬い。リビングのソファに座る新一を残して、蘭はキッチンへと入った。

——ダメだっつてば、蘭！ このまんまじゃ渡しにくいでしょ！
？ ささって渡しちゃえばいいんだから！ コーヒー渡す時に一緒に……。

コーヒーを淹れながらもう一度大きく深呼吸して、リビングへと戻った。

「はい、コーヒー」

「サンキュ」

「あと、これ……」

おずおずと、持ってきたチョコレートを差し出す。

「今日、バレンタインだから……」

「あ、ああ……」

お互い顔を横に向けつつ話すものだから、端から見たら非常に不思議な光景である。

新一がさっそくラッピングを外して中身を取り出し、赤色の箱を開けた。

「……あ、桃型」

「ハートよ!」

「ぷっ。分かってるって。サンキュ。——今食っていい?」

「うん」

嬉しそうにチョコを食べる新一を、心配そうに蘭が見つめる。

「甘い……」

「え!?! 新一用にちゃんと苦めにしたつもりんだけど! ゴメンね!?!」

やっぱり新一にはこれでも甘いのか。少し悲しくなって、思わず俯く。

「バ一口、そんなんじゃないよ」

「え?」

顔を上げて新一を見ると、——笑っていた。

蘭が一番好きな、かつこ良くて、不敵な笑み。

思わず見惚れた蘭に、トドメを刺すかのように新一が囁くように言った。

—— オメーがくれたものだから甘いんだって、
いい加減気付け
よな？

甘い？ 苦い？（後書き）

【まずは新蘭♪】

みなさま、こんにちは。ペロコです。さーて、やってまいりましたバレンタイン！

ということで、特別出血大サービス（？）で3話一気に更新です
バレンタイン3部作！

その1組目は新蘭から。

新一さんは甘いものが苦手だから、蘭ちゃんは小さいときからいかに甘くないようにするかに気を配り続けていたと思うんです。そして、新蘭でバレンタインといえば、もちろん『桃型チョコレート事件by探偵キッド』だと思いませんか！？（笑）

ということで、それも入れさせていただきました。楽しかったです！
前回の節分話とは打って変わって、非常にキザな新一さん。蘭ちゃんとの2人きりの時間を甘く過ごしたいみたいです。……甘すぎた。自分で書いてて恥ずかしい！

一気に読みたいであろう読者さま、いざ次のページへお進み下さい。
次は平和コンビです。となると、もちろん最後は快青で。
では、次の平和話の後で再びお会いしましょう。

気持ち

いつだって、恥ずかしくて勇気が出ない自分が悔しかった。

小さいときからずっと、平次のことが好きだった。普段は突き放した感じがするのに、いざというとき頼れるのはいつだって平次だった。

でも、幼なじみの関係を壊すのが怖いのと、自分の意地っ張りな性格で毎年チョコを渡せなかった。

大抵の物事をそつなくこなし、持ち前の明るく豪快な性格もあって人気者だった平次は、小学生の時からとにかくよくモテた。

バレンタインや卒業式なんかの告白シーズンに告白されてる平次を見るのが、いつも悲しくて心が痛んだ。

そして、告白を断っていたと聞いているのは、ホッと安心する自分がいって、それも辛かった。

告白する勇気もなくせに、平次の側に居れる自分は恵まれているのかもしれない。そんな優越感にも似た感情を持っている自分がまた嫌だった。

告白を断っていた平次に対しての安心感。

告白を断られた子への同情のようで、実は優越感。

告白シーズンの帰りは、自分の気持ちがいっつもグチャグチャで、自分は平次のお姉さん役なんやから、と無理にでも自分を落ち着かせるのに精一杯で、平次のことなんて全く考える余裕もなかった。

だけど、今年は。今年こそは、平次にチョコを渡したい。彼女なんだから、彼女らしいことをしたい。

大学に入っても続けている剣道のサークルのために、平次は今日も大学へと行っている。夕方には練習が終わると言っていた。待っているにも怒られないだろう。

作っても渡せなかった今までの分の気持ちも込めて作った、今年のチョコレート。

それを大事に両手で持って、コートを羽織って、大学への道を小走りに進む。

——到着した和葉が見た光景は、衝撃だった。

まるで、ハーレム。アイドルの出待ち状態の女の子の群れ。

体育館の入り口は女の子で埋もれて見えなかった。思わず引き返して、門の影に隠れる。

——何なん！？ あの女の子たち！ 平次の周りにいっぱい女の子がチヨコ持って……。平次、受け取るのかな？ 優しいもんな、平次は。

うつすら浮かんできた涙を腕でグイッと拭く。

「和葉、何やつとんねん？」

「へ、平次！？」

いつの間に目の前に……いや、それよりも、この泣いた顔はアカン。

「何や、泣いてたんか？ どないしてん？」

「何でもあらへん！」

「何もあらへんことないやろ。目え、赤くなってるんで？」

「何でもない！ 大丈夫やし、気にせんという。ゴミが入っただけや」

こんな理由で騙される平次ではないが、頑なに言い張るため、追及を諦めた。

「……さよか。ほんで、どないしてん？」

「平次待ってたんやけど……もうエエわ」

「何やねん、意味分からへん。——それより、それ何や？」

「へ？」

「せやから、手に持ってるやつやんか」

「あ、コレは！ あの……」

両手に握り締めたままだった、平次に渡すために持ってきたチョコ。もう、この役目は無い。

「何や、もしかしてバレンタインのチョコか？　くれんの？」

さすが探偵というべきか、はたまた、さっきまで大量のチョコレートに囲まれていて分かったのか。一体どちらなのは、不明である。

「へ、平次は他の女の子からよーけもろたんやろ！？　アタシのなんか」

「アホ。もろてへんわ、そんなん」

「え、でもさつき、いっぱい人いはったやん！　何で……」

「あんなん別にいらんねん。——あ、もしかして、それで泣いたんか？」

「……………」

凶星である。

「受け取るわけあらへんやんか」

呆れたように、平次が言う。

「で、でも一生懸命作らったやつやのに……」
「ちゃうがな」

「へ？」

「オレが欲しいんは、和葉のやつだけや」

固まった和葉をふわりと抱き締め、平次が耳元で囁いた。

——せやからくれや？ 和葉の今までに溜まったたくさんの気
持ち。

気持ち（後書き）

【次は平和です♪】

こんにちは、ペロコです。バレンタイン3部作、第2話の平和はいかがでしたでしょうか？

普段の2人とはまるで違う、甘い雰囲気にしてみました！

和葉ちゃんの性格を、すごく意地っ張りでチョコを渡せてないということにしてみました。そして、平次は平次で、鈍感やけど変なところが鋭く、また照れ屋でもあると。

そんな平次が（門の前で！）和葉ちゃんを抱き締めるのって、すごいことだと思いませんか？ あの平次ですよ！（笑）

彼は、すごく不安になっていた和葉ちゃんを安心させてやりたい一心です。だから、普段では出来ないような行動も取れる。甘いな！

一気に読みたいであろう読者さま（↑いるのかな？）、お次がラストにございます。快青です。大丈夫、3段オチなんて酷いことはいたしません。お約束いたします。

ペロコが無い脳を絞りきって出した甘いバレンタイン3部作、ラストの作品も楽しんでいただけたら嬉しいです。

ではどうぞ、最後の快青編へ、いざ！

甘いもの

きつと、あの時計台の下で出してくれたバラを見たときから、快斗のことが気になりだしたんだと思う。

そのときはまだ、その感情がどういう意味を持つのかは自分は分かっていたなかったけれど。

あれから、たくさんの快斗の顔を見てきた。ふざけてる顔や、怒った顔、寝顔まで見ちゃったけど、青子が一番好きな、好きで好きで仕方ない顔は、甘いものを食べている時の幸せで溢れた笑顔。

その笑顔は、本当に甘いものを食べている時しか見ることができなくて、よくケーキバイキングとかに快斗を誘い出していた。

バレンタインの時期は、特に頻繁に見れて嬉しかった反面、甘いものに目が無い快斗は、どんなチョコでもクツキーでも受け取ってしまうから、悲しかった。

青子が渡しても、その中の1つにしかねない。まして、快斗はバレンタインの意味すら知らなかった。

いまだき、ある意味恐ろしいけど、本当に知らなかったようで、単に甘いものがもらえる日という認識をしていた。

その時はまだ知らなかったけれど、今から思うと怪盗キッドがバレンタインを知らないなんて色々とまずかったんじゃないかと思う。

快斗がバレンタインの本当の……本来の意味を知ったのは、高3のときだ。

快斗がキッドとして組織を倒して帰ってきた後。彼女として初めて快斗に渡したのは、苦労して作った生チョコだった。

口の周りにいっぱいココアパウダーを付けて、おいしそうに食べてくれたときの笑顔を思い出すと、今でも顔が赤くなる。

そこで初めてバレンタインという日の意味を教えた。

快斗は、普段から心がけているらしいポーカーフェイスを宇宙の彼方に吹き飛ばしたみたいに真っ赤になって面白かった。それを見て思わず笑うと、快斗はふて腐れてしまったけれど。

今年も、快斗のあの笑顔が見たい。だから、今年も頑張って準備した。もうすぐ快斗が家に来る。

部屋中に広がった甘いにおいの中で深呼吸する。目を閉じると快斗の笑顔が浮かんでくる。

「快斗……」

——甘党の快斗は、どんなお菓子でも喜んでくれるけど……青子が見たいのは、作った笑顔じゃない。本当の、自然と浮かんだ心からの笑顔。今年も見せてくれるかな？

ピンポン。

「青子ー、来たぞー！」

「はい！ 上がって、快斗」

玄関まで迎えに行つてドアを開ける。

「お、いい匂いじゃん」

「でしょ？」

リビングのドアを開けて、快斗の方へと振り返る。

「じゃん、今年はチョコフォンデュにしてみました！」

「おー！ すげえじゃん、青子！」

苦労して準備してよかった。そう思わせてくれる快斗の笑顔。

「えへへー。いっぱい用意したよ。何かから食べる？ イチゴ？ バナナ？ あ、マシユマロもあるよ」

「青子」

「へ？」

「青子がいい」

「……バ、バ快斗！ 何言つて……」

そんなこと、言われたことない。せつかく一生懸命準備したのに、食べてくれないのか。チョコレートにはもう興味ないのかな。ふざけないでほしい。

バレンタインなんだから、いつもよりもっと快斗の笑顔が見れると思っていたのに。

「ふざけてねーよ?」

青子の心を見透かしたかのようなタイミングで、快斗が否定する。

そして、部屋の中に入って、まだ入り口のところに立ったままの俯いた青子の方を向いて、再び歩み寄ってきた。

目の前に立たれて思わず顔を上げた青子は、ビックリした。

すごく真面目に、青子の目を覗き込む快斗の顔。自分の顔が快斗の目に映っている。

「あ……」

何も言えずに口を開くと、それを封じるかのように快斗の表情が変化した。

それは、今まで見てきた中でも、最も嬉しそうで幸せそうで蕩けそうな笑顔。

見とれていると、その快斗の口が開いて、ゆっくりと言葉を発した。

——青子以上に甘いものなんて、オレは知らねえんだから。

甘いもの（後書き）

【ラストは快青で！】

どうも、ペロコです。バレンタイン3部作、お楽しみいただけましたか？快青もちろん甘くして終わりです。

チョコフォンデュが自宅で作れるのか……その真相は不明ですが、この後どうするんでしょうね？（笑）

快斗の甘いものを食べている時の笑顔って、多分他の笑顔とは違うと思うんです。マジックをしているときや、キッドとしての不敵な笑みとは違う、笑顔の中の笑顔が、青子ちゃんは好きなんじゃないでしょうか。多分……。

さーて！バレンタイン3部作として甘いものばかり書かせていただきましたが……皆様はどれがお好みでしょうか？今回のこの3話は、ラストの会話部分が先に浮かびました。男達の甘いセリフで終わらせるということも。なので、会話シーンはここだけにしたかったんです。読みにくかった方には申し訳ないですが、今回のペロコのこだわりということでお許し下さい。

そして前半は、一人称のような三人称のような？女の子たちのそれぞれの思いと、バレンタインにかける思いを。それぞれ抱える思いも違えば、バレンタインの思い出も違います。

今回、この3つを書く際、会話が先に思いついたと先ほど述べましたが、完成してみると……ちょっと甘すぎますね。読み返してみても「甘……」と思わず呟き続けたペロコです。色んな意味で疲れちゃいましたよ。節分とのギャップが恐ろしい！何だ、このバラバラ感は！

では、次の『メモリアルデー』は……えっと、ひな祭りですか？ど、どうしよう！全く思いつきません。思いつかなければ、ホワ

イトデーということで。スイマセン。

そして、スランプ継続中であり、『メモリアルデー』にかかりつきりだったため放置状態の『キッドside2』も頑張ります！

感想や、バレンタインの思い出話（笑）などなど、いつでもお待ちしてま〜す！

これからもしろしくお願いしますね。長くなつてすみませんでした。

ペロコからのお詫びとお知らせ

皆様、大変お久しぶりです。ペロコです。

このページを開くまでに、一体どれくらいの方があらずじに目を通しておられるのかは分かりませんので、こうして登場させていたきました。反則でスイマセン！

長らく更新していなかった「メモリアルデー」ですが、このたび執筆を中断させていただくことにいたしました。

原因は、ペロコが時間を作れないから、の一言に尽きるのですが。

「メモリアルデー」はリアルタイム更新というコンセプト（？）ですとやってきたので、リアルタイムで更新できなくなったあのバレンタインの後のひな祭りかホワイトデーか……とかで悩んでいた時点で既に危険でした。

春休みの間、全く時間が取れなかったからです。

そして、今は4月も終わろうとしております。1日のエイプリルフルも更新できませんでした……。本当に時間がありませんでした。更新できなかったことをお詫びいたします。

この連載とは向き合ってもうすぐ約1年になります。新一のあの衝撃の誕生日会から1年……。たくさんの方に読んでもらって笑ってもらって、ペロコは非常に嬉しかったです。

もともと、記念日に合わせた話を書くのは好きだったので、オリ

ジナルでペロコ自身の想像と妄想で書いていくというのが楽しくて仕方ありませんでした。

ですが、リアルタイム更新が出来ないというのがペロコ自身が辛いのです。やっぱりその日にあわせたテーマで書いてるわけですし、その日に更新できないというのはこの「メモリアルデー」を続けて書いていくというのも難しいわけです。

執筆を停止するのはこの「メモリアルデー」に限ったことではなく、「キッドside」もストップさせていただきます。

そちらはそちらで、このようにしてお詫びの形で同じようにペロコからということを書かせていただいておりますので。まあ、内容はほぼ同じなのですが。

たくさんの方にコメントもいただきまして、「面白かった」とか「こんなのを読みたい」とかいっぱい意見をいただきました。本当にありがとうございます。

ですが、『完結』という形にしなかったのは、今後復活して、また書いていきたいと思ったからです。短編なので別に『完結』という形にも出来たんですけどね……。

コメントの返信も遅れてしまっていて申し訳ないです。この後、お返事させていただきますので！ コメント欄は、今後も開けておくつもりです。何かあれば書いてください。もちろん、停止に對しての小言、ぐらいでしたら大丈夫です。罵詈雑言になったらさすがにペロコも今後復活した際、執筆していくのは怖くなりますので、遠慮していただけたらありがたいです；

では、こんな形で登場してスイマセンでした。また復活できた際にはお付き合いしてくださいと嬉しいです。復活は……予定では夏頃です。未定ですが。

D i s g u i s e

その日、工藤邸は朝から大賑わいだった。

「こんなんでどうかな？」

「えー、もう少し派手の方がいいんじゃない？」

「でもこれぐらいにしておいた方がよくない？」

「あんましやりすぎてまうと、キツく見えんで」

「でもなあ……」

「……オメーら、朝っぱらから人んちで何してやがんだ」

10月も終わりの日、朝9時。だらだら過ごす気満々で、まだ眠っていた新一を起こしたのは、いつもの5人だった。昨夜、きちんと戸締りしたはずだ、という突っ込みは無用だ。合鍵を持っている蘭もいるし、……何より鍵すら不要の人物もいることだし。

「新一、やっと起きたのね。ほら、早くこっち来て！ 新一も選んでね」

「……は？ いや、っかオメーらその格好」

「何寝ぼけてんだよ。今日はハロウィンパーティーに呼ばれてたろ」

今新一の目の前には、工藤邸の広いリビングが広がっている。普段ならば、綺麗に片付けられた朝日の差し込む優雅なリビングのはずなのだが、今は所狭しと並べられた様々な服やメイク道具に溢れかえっている。

「園子ちゃんとか、初めて行くわー」

「青子も！ テレビで見たことあるぐらいだったし」

「工藤ー？ 起きてるかー？」

そう言いながら顔の前で手を振った平次は黒いマントを身に付け、牙が見えている。最初に声を掛けてきた蘭や、はしゃいでいる和葉と青子はどう見ても魔女の格好である。4人の格好をココまでパーフェクトにやってみせたのは、考えるまでもなくニヤニヤと新一を見ている快斗しかない。

「ほら、新一もやってやつから早く選べよ」

「……いやいや。聞いてねえし」

「えー、ちゃんと言っただじゃない！ 昨日」

「昨日って……ギリギリすぎんだろ」

「済んだことはいいじゃない。新一は何にする？」

ニコニコ微笑みながら、実は結構キツイことを言っている蘭は魔女の格好なのだが、新一の欲目を無しにしても可愛い。

「早くしろって！ 時間ねえんだし。どうする？ —— あ、昨年

のあのブルーのワンピースにするか？ サイズもピッタリだし！」

「バーロ！ あんな物また着るわけねえだろ！」

そもそも、あの格好をして行った時の園子の様子を想像するだけでも冷や汗が出る。

「またまたあー。大事にタンスに仕舞ってるくせに」

「バツ……！ 何でオメーが、んなこと知ってたんだよ！」

「新一、オレが誰だと思ってるの？」

「……聞いたオレがバカでした」

嫌な思い出しか無い今年の誕生日に着せられたブルーのワンピースは、結局処分に困ってしまったものの、蘭が新一のために選んだ、という事実だけは新一の中から消えず大事に仕舞いこんであるのだ。

「でも工藤。そのワンピースもある意味“仮装”やで？」

ニヤニヤ意地悪く新一を見る平次に、新一は一喝した。

「バーロ！！ それじゃ“仮装”じゃなくて“女装”だろうが！！」

——結局。

ここは新一にとって負けられない戦いだったため、快斗と平次の作り出した雰囲気と提案をしつかりと跳ね除け、無難にドラキュラの格好を選ぶことになった。

……が、これすらも計算のうちだということに新一は気付けなかった。

つまりは。

普通に誘っても新一が行きたがらないことは皆知っている。たとえば、前日にきちんと蘭が「一緒に行こうね」と言っておいたとしてもだ。だから、あえて新一が選ばない選択肢を与えることで、服を

選ばせ、自ら参加するという形になるように空気を作り出していたのだ。

第三者が見れば、分かりやすい、むしろ分かりやす過ぎる作戦だ。しかし、今この場にいるのは新一本人と、空気を作り出した当事者5人のみ。ご丁寧に指摘してくれる人もおらず、この真相は5人の心の中のみ残ることになったのだった。

ちなみに、これが新一本人に対する『イタズラ』であることも、新一本人は全く気付くことは無かったため、このことも5人の心の中に密やかに納められることになったのだった。

Disguise (後書き)

【リハビリハロウィン話】

みなさま、大変お久しぶりでございます。ペロコです。

メモリアルデー、久しぶりに更新させていただきました。中秋は時間の関係上無理でした……。今年は10月3日だったんですね。お月様、見ましたか？

さて、この話を読まれた皆様は、まず思ったことでしょうか。

「え、ここで終わり!?」と。すいません、ここまでしか出来なかったんです。ちゃんとパーティーも考えようと思っていたんですが、リアルタイムにこだわっているので更新優先だよな、と。それに長くなりすぎるし……。とか、言い訳ばかりで申し訳ないです。

『番外編』で更新できたらいいなあと思います。(未確定)
出来ればクリスマスまでには何とかしたい。(希望)

そして……。どうでしたか？ 久しぶりのメモリアルデー。まだまだリハビリ中のペロコは、感覚を取り返すのがいっぱい입니다。説明でゴチャゴチャしすぎたかな、と反省しております。改めてみると、くどく見ええますね。まだまだだなあ、本当。精進せねば。いつまでも引きずり続ける“新一女装ネタ”ですが、コレは永久にネタとして扱われます。(笑)

長くなりましたが、読んでいただきありがとうございました。感想お待ちしております。色々応援メッセージ、いつもありがとうございます。います！ 励みになってます！ ペロコは単純な人間なので、褒められると頑張ろうと思うタイプです。(笑)

あ、ちなみに。タイトルは英語。意味はそのまま『仮装』です。

夢

「快斗はさー、やっぱり小さい頃からマジシャンになりたかったんだよね?」

三寒四温の言葉通り、気温差が激しい日が続いている春のある日。青子は、快斗の家でまったりと寛ぎながら目の前にいる快斗に、ぼんやりとした表情を浮かべつつ呟いた。

「あ? そりゃーな。目指すは親父って小さい頃から思ってたし。……何でそんなこと聞くんだ?」

新作のマジックを完成させるために、今も練習に勤しみつつ顔を上げないで、快斗は手元を見たまま聞き返した。

「うーん……特に理由は無いんだけどね? 何となくふと思って」

返事をする青子は、やはりどこか心ここにあらずといった感じがあり、それを見ないまでも雰囲気を感じ取った快斗は、顔を上げて青子の顔を覗き込んだ。

「マジでどしたの? 今更聞くことでもねえじゃん。情緒不安定?」
「失礼ね! いたって普通よ! 本当に何となく思ったただけだもん」

成人を迎えてもどこか幼さを残したままの青子は、頬を膨らませつつ少し顔を赤くした。

「ふーん、何となく、ねえ? そういや青子は? 何かになりたいもんとかあんの?」

「え、青子？ ……うーん、なりたかったものはあったよ」

「へえ。何か意外だな。そっぴや青子の夢って聞いたこと無かったもんなあ」

「話さなかったもんね」

「で、何？ 何なの青子になりたかったのって」

どこかいたずらっ子のような笑みを浮かべつつ、快斗は楽しそうに尋ねた。

「えー？ ……笑わない？」

「笑わねえよ別に。（……多分）」

「（絶対今多分って思った！）うーん、看護師さん、とか？」

「……は？ 青子が？」

「……何か文句あるの？」

ぶっ。

「あはははははっ！！」

「もー！ 笑わないって言ったじゃない！」

「わりいわりい。何かすげえ意外だったっていうかさ。青子が？
って思っちゃったら笑いが止まらなくて……、あー、おかし」

「ヒドイ」

「だから悪かったって言うてんだろー？ でもどうして諦めたんだ
よ？」

ひとしきり笑った後、ふと真面目な顔に戻った快斗は尋ねた。

「どうして諦めたなんて分かるの？ 青子言っただけ？」

「いや、最初から過去形で話してたし……、今も目指してんなら看護学校とか行くだる普通」

「あ、そつか。必要が無くなったからだよ」

「別に青子が看護師になる必要なんて無かっただろ？ 義務でもあったわけ？」

「……秘密」

「は！？ ここまで話しかよ！ なんだよ言えって！」

「だって……、重いんだもん」

「そりゃ夢なんだから重いもんだろ。軽い夢なんて普通ねーよ」

穏やかな顔をしながら話す快斗を見て、青子は自分の中で決意する。

「実はね。……快斗がね、キッドだった時あるでしょ？」

「え、……キッド？」

「うん。キッドだったらさ、もちろんして欲しくはないんだけどどうしても怪我とかしちゃう時あるでしょ？ そんな時、もしかしたら普通の病院じゃダメかもしれないから……。せめて帰って来た時に青子が少しでも治療とかできたらいいなとか……。そんなこと思ってただけ！ ごめんね重くて！」

「……」

「快斗？ 引いた、よね？ ゴメンね。今は快斗がキッドを止めることができたからもうこの夢は追わないことにしたの。必要が無くなったこと、むしろ嬉しいんだよ？」

ふわっ。

「ちょ、ちよつと快斗！ どうしたの？」

「……んー？ 何か抱きしめたくなった」

「え、えつとあの……。ええ！？ ちよつ、え？」

「ふっ、キョドリ過ぎ」
「だ、だって」

快斗に突然抱きしめられて顔を真っ赤に染めている青子を見て、
快斗の心が和んでいく。

「何か、サンキュなマジで」
「何でお礼言うの？」
「言いたくなっただから」

そして、抱きしめた体勢のまま、快斗は呟くように青子の耳元で
囁いた。

「青子のこと、好きになってよかった……」
「っ……！」
「ふはっ！ 真っ赤だぜ青子ちゃん？」
「……バ快斗」

ますます顔を赤くする青子を見ながら、ふと快斗は疑問に思う。

「そっぴやさ、今は夢ねえの？」
「え、今？」
「そう。今」

とりあえず抱きしめていた腕を解いて、元の位置に戻りつつ快斗
は尋ねた。

「今は……、幼稚園の先生、とかかな？ 子供好きだし……！」
「へえ、幼稚園の先生ね……。青子が先生じゃどっちが子供か分
かんねえけどな」

「ちょっと！ そんなことないもん！！」

「どうだか」

「……それでね！ 快斗には時々マジックやってもらいに幼稚園に来てもらうつもりだから！！」

目を輝かせながら夢について語る青子に、思わず意地悪をしたくなる。

「オレ、高いぜ？ 大丈夫なのその辺」

「そつ、それは……、ホラ幼馴染のよしみで何とか！」

「あはは、ウソだって。でもさあ……、その頃はまだオレら幼馴染なわけ？」

「え、違うの？」

「そこはホラ。青子先生の旦那として行ってやるよ」

「！！」

「ぶっ…… あははははっ！！ 青子マジで顔真っ赤！！」

「もう……！ バ快斗！」

「いてっ！ ちょ、叩くなよ！」

「からかった罰よ！」

何度も何度も手を振り上げて快斗を叩く、その青子の右手をパシツと捕まえて快斗は自分の方へと引き寄せる。そして倒れてきた体を受け止めつつ、抱きしめながら囁いた。

「コレはウソじゃねーから」

今までとは比べ物にならないくらい真っ赤に染まった青子の顔を見て、また快斗が爆笑するまであと少し――。

「（本当はKIDが好きだったから子供が好きになったんだよ？）」

いつだって、その魔法を紡いでいく手を見て笑顔になる小さな子供たちやテレビを見ていたKIDのファンを間近で見てきて、自分も笑顔を与える仕事がしてみたいと思ったのが最初だった。

ただ、そんな漠然としたものでは方向もなかなか定まらなくて。そんな時、小さな公園で子供たちと一緒に遊んでいる幼稚園の先生を見て青子は思ったのだ。

きつと、笑顔というものは「与える」ものではなく「浮かぶ」ものののだと。その先生の足元にはたくさんの子供たちがいて、「先生遊ばー」と引っ張りだになっていた。引っ張っている子供も、引っ張られている先生も、どちらも満開の笑顔が浮かんでいたのがとても印象的で。

このお仕事なら、自分にも出来るんじゃないか。この夢を追うならば、毎日笑顔に囲まれて生活できるんじゃないか。

そう思い出したら、とても魅力的に思えた幼稚園の先生という仕事、その時からの青子の新たな夢になった。

それは、青子の中にだけ秘めた^{ホント}真実。

夢（後書き）

【エイプリルフルー！】

皆様、大つつ变お久しぶりです。ペロコです。この1ヶ月ぐらい、何となく顔を出しつつあったので交流のあった方もいらっしゃいますが、大半の方は久しぶりです。本当に。いつ以来だよって考えたら、リアルに半年前で驚嘆しました。（笑）

さて、覚えておられない方もいらっしゃるかもしれませんが。ペロコは今現在、きちんと大学に通っております。結構毎日頑張ってます。来週からは春休みも終わり授業が始まります。3回生の春就職活動もぼちぼち始まるかなってところです。

そんな個人情報はこちらにしておいて。

この話は、……まあ何が書きたかったのかって言われたら分からないんですけども。（笑）

でも久しぶりに書くなら快青がよかった。もちろん、そこにはまじ快アニメ化おめでとの意味も込めて。その知らせを聞いた時はびっくりしましたが、ペロコはアニメマックスに入っていないので見れないためかなり残念な気持ちでいっぱいです。

青子ちゃんの夢についての話でしたが、どうなんだろう。寝てる時に見る「夢」だとタイトルを見た時に思った方っていらっしゃるんですかね？

『夢』についてとりあえず何か書くこうと思って書き始めたので、そちの可能性もあったんですよ。夢の中で見た青子ちゃんが、普段の子供っぽさを全く持っておらずむしろ快斗くん大人の魅力で迫って、快斗くんが焦る……とか。（笑）

まあそれは機会があればまたいずれ。（え）

長くなりましたが（後書きが長くなるクセは変わっておりません）、ココまで読んでくださりありがとうございました。

次に一体どんな話を投下するのか全く予想もつかないのですが、もしかしたら連載の続きかもしれないし、もしかしたらまた新しい話に手を出してしまうかもしれないし……もしかしたらまた半年以上姿を見せないかもしれないですし。

先のことは未定で何も見えてない状態なのですが、まだ書いていきたいという気持ちはあるので、再び現れた際には読んでくださると嬉しいです。

ホントに長いな。

最後までお付き合いくださりありがとうございました。

これからもよろしく願います！！

賑やかな朝

世間はゴールデンウィークのためか、多くの人は出掛けていた。そして、阿笠博士も例に漏れず、いつものように探偵団を連れてキヤンプに出掛けていた。つまり、とても静かな米花町2丁目。その静かさを満喫しようと、ひたすら眠り続けていた工藤新一の住む工藤邸に

「ハア〜イ新ちゃん！ 元氣してた〜?!」

……嵐がやって来た。

泣く子も黙る工藤新一を『新ちゃん』と呼べる人物はおそらく1人しかいないだろう。実の母親である有希子だ。普段は夫である工藤優作と共にアメリカ、ロサンゼルスにいるはずなので、日本にいるはずがないのだが。つまり、今この日本で工藤新一を『新ちゃん』と呼べる人物はいなかったはずなのだ。

「な、何だあ!？」

当然、しっかりと惰眠を貪っていた新一もこの大声には飛び起きた。何せ『新ちゃん』と呼ばれなくなっただけの久しいのだ。時々快斗が冗談で『新ちゃん』と呼ぶことがあったことを数に入れなければの話だが。

「あら、寝てるのかしら？ 物音しないわね」

「おそらく寝ているんだろうね。全く我が子ながら相変わらずルーズな生活をしているようだ」

「何よせっかく実の両親が遠路はるばる訪ねてきてあげたつていうのに！ 新ちゃんの裏切り者！」

「そう怒ってやるなよ有希子。今回は我々が何も言っていなかったのが悪いのだから」

「優作は甘いわよ！」

「君ほどじゃないさ」

「あら、いつ私が新ちゃんを甘やかしたつて言うの？」

「新一がまだ幼い時に欲しいと言ったものは何でも買ってあげていたことの、どこが甘くないつて言うんだい？」

「あら、親として当然じゃないの。それに新ちゃん元々物欲なかったんだし買ってあげなくなるじゃない」

「まあそれは分からんでもないが……」

「何してんだ玄関で？」

ほつといたらいつまでも続きそうな夫婦の会話を止めたのは、子供である新一だった。

「あら、新ちゃんおはよう。いい朝ね」

「ああ、こんなに朝早くに起こされることが無かったらな」

「早いかしら？」

「……朝7時のどこが早くないのかぜひとも教えてもらいたいところだ」

「相変わらず口が達者だな新一」

寝起きだったこともあり、口調にイラッとした雰囲気が出ていた

のだろう。優作が指摘すると新一はムツと眉を寄せたが、口で勝てる相手ではないことを思い出し、流すことにした。大分とオレも大人になったな、などと内思いながらではあったが。

「久しぶりだな、父さんも母さんも。今日はどうしたんだ？　一緒つてことは喧嘩して逃げてきたわけじゃねーんだろ？」

「まあ失礼ね！　そんないつも喧嘩してるわけじゃないんだから！」

「こつち戻ってくる大半の理由が喧嘩じゃそれも説得力ねえけど」

「今日は我が息子の誕生日を祝いに戻ってきたんだよ」

「……誕生日？」

思ってもみなかった返答に新一の目が丸くなる。

「何でまた今年は直接祝ってくれんだ？」

そう、何を隠そうこの5年は一緒に誕生日を祝っていない。海外生活をするようになった両親と一緒に誕生日なんてものを過ごしたのは中学3年の時がおそらく最後だ。それ以来、毎年プレゼントはダンボールに詰められて国際便で届けられていた。

「久しぶりに予定が空いたんで、たまには我が子の誕生日と一緒に祝うのもいいかと思ってね。何か都合が悪かったかい？」

「いや、別に構わねえけど……。でも今更何すんだ？」

「何か欲しいものとか無いの？」

「んー……。とりあえず上がれば？　玄関にずっといんのもアレだし」

突然欲しいものを聞かれても何も浮かんで来ない自分に苦笑いを浮かべながら、ひとまず室内へ入ることにした。

「それにしても新ちゃん。とうとう自分の誕生日を覚えることが出来たのね！」

「ああ、……色々あつてな」

誕生日を覚えることが出来たという成長はあまり嬉しくないような理由が理由だし……と新一が思いつつ苦い表情をしながら有希子の感動に対応していると、横からさらに曲者の指摘が入った。

「その『色々』というのは、もしやあの写真のことかな？」

「ゲッ！」

優作の指が指した先にあったのは、もう一昨年になった自分の誕生日の写真である。きちんと約束を守って律儀に飾っていた自分を新一は今更ながら呪いたくなった。

「あら、何の写真？」

「見なくていい……！」

有希子が優作の言葉（と新一の表情）に釣られて写真立ての方を向いた瞬間、新一が、ビーチフラグの競技で世界記録を出せるのではないかというぐらいの驚くべきスピードで飛びかかった。

「あ………」

思わず飛びかかってしまったが、こんな反応をすればどうなるかは目に見えている。

つまりは。

「あら何？ 隠し事はよくないわよ、し、ん、ちゃ、ん」
「か、母さん……」

まるで楽しいオモチャを見つけたかのように目をキラキラ輝かせながら、新一に迫る有希子に、新一は精一杯上体を反らす。

「ちよっ、離れろよ母さん！」

「新ちゃんが隠し事なんてするからでしょ？」

「分あーった！ 分かったから！ 見せるから離れて！」

とうとう新一が降参すると、有希子は満足気に微笑み体を離れた。

「うふ、分かればいいのよ。それで、何？ その写真」
「実は……」

ようやく離れた有希子の体にホツとしたのもつかの間。次はこの悪夢について自分の口から説明しなければいけないのだ。どっちが良かったのか、今となっては判断出来ない。

だが、神は新一を見捨てなかった。

話し出そうとした瞬間、ピンポンと間の抜けた音が家に響いたからだ。

「あ、誰か来た」

「あら、逃げる気？」

「客だから仕方ねーだろ」

「ほっとけばいいのよ！」

「そういうわけにもいかねーだろ！」

言い合いをしている間にも再びベルが鳴る。

「私が出ようか」

そう言ったのは傍観者を貫き、久しぶりの親子対面に感動していた優作だった。

「お願いね！」

我が味方を得たり、と機嫌が良くなった有希子に対して、唯一の救いだっただこの状況からの脱出を取られた新一は焦る。

「ちよっ……！」

だが、優作は構わず玄関の方へ行ってしまう新一の制止は意味がなかった。

「さ、新ちゃん。説明してただけかしら？」

ガツクリと頭を下げてしまった新一に対し、有希子が楽しそうに追及を始めた。

……ところに、クラッカーの音が玄関から大音量で響いてきた。

「な、何!？」

思わずビクッと体を震わせる有希子に聞こえて来たのは、何人かのハッピーバースデーの声だった。

「
……」

リビングと玄関で共に同じような沈黙が降りる。1人状況を悟った新一は、額に手をあて、天井を仰いだ。

とりあえず新一は黙って玄関まで向かい、そしてそこにいた固まったままの優作と友人たち——いつものメンバーである——をリビングまで招き入れた。

そして。

「……で。オメーらは何しに来たんだ？」

とりあえず尋ねなければ始まらない、と新一が快斗に尋ねた。

「新一の誕生日を祝いに……。昨年は予定合わなくて出来なかったから、今年は押し掛けようぜって話になっててさ」

「何もこんな朝っぱらから……」

「せっかくの誕生日なのに寝て過ごすのは、もったいないよ」

「そらどーも」

「まあピンポンの音でドアが開いたし、おかしいなとは思ってたんやけどな」

「どついう意味だ」

「新一のお父さんとお母さんは、いつこちらに戻って来られたんですか？」

そう尋ねたのは、目を丸くしたままだった蘭だ。

「今朝よ」

「え、今朝ですか!？」

「ったく……、何でオレの都合は無視してんだか」

「久しぶりね、蘭ちゃん。すっかり美人さんになっちゃって」

「そ、そんなこと……」

息子の新一との再会が久しぶりであれば、つまりそれは蘭との再会も久しぶりということになる。有希子が肘で蘭を小突きながらニコニコと上機嫌で蘭で遊んでいたところに、

「あ、あの!」

「え？」

何となく緊張した様子で声を発したのは和葉だ。

「もしかしくなくても、工藤有希子さんですよね?!」

「え、ええ」

「わー！ 知ってはいたけど本物初めて見るわぁ！ あ、アタシ遠山和葉ていいます！ お父ちゃんが大のファンで、引退したときはテレビの前で号泣したんはウチの伝説なんです！」

「あら、ありがとう」

思わぬところで自分のファンだということを知り、有希子の機嫌が良くなった。

「あの！ 私、中森青子つています！ 私のお父さんもファンで、ドラマとかよく見てたんです！」

「まあ」

さらにファンだという人物の登場に、有希子の機嫌は最高潮に達する。

「新ちゃん！ 優作！ 私まだまだ現役でいけるんじゃないかしら！！」

「や、もう無理だろ」

「有希子ももう芸能界から退いて大分と経ったんだし、私との生活の時間をもっと優先してくれてもいいんじゃないかい？」

「そうだけど……」

「それより新一。紹介してくれるかな？ 彼らのこと。……ああ、女性の方は先ほど名前を聞いたからね。もう大丈夫だよ」

と、優作が大分と遅いがそれぞれの紹介を促した。

「あ、そうか。えっと、こっちの黒いのが服部。ほら、よく話してただろ？ あの服部だよ」

「ああ、君がそうだったんだね」

「工藤、黒いつちゅう紹介の仕方は無いんとちゃうか？」

「間違つてねえし」

「……さよか。あ、服部平次います。よろしゅう」

「貴方が服部くんね！ 新ちゃんからよく話は聞いてたわ！」

ニコニコしながら有希子が平次の方を向く。

「……工藤。ワシのこと、どんな風に話してんねん」

「秘密だ」

「はっ！？」

視線をそらしながら言った新一の答えに平次の声が思わずひっくり返った。

「で、こつちが……」

「無視かい」

もはや新一のこういう態度は今更なので、平次もそこまで気にしていられないが、されて嬉しいものではない。と、その時。

P O M

「どうも、黒羽快斗です。マジシャン目指して修行中の身ですが、以後お見知りおきを」

「あら！ 快斗くん！？」

「え？」

「覚えてないかしら。私、盗一さんのところに弟子入りしたことあって、それが縁で彼について本も書いたことあるんだけど……」

「親父と！？」

「そうか、快斗くんだったんだね。大きくなったね。ああ、当然の

ことか。新一と同じ年なんだからね。我々が年を取ったということかな」

「小さい頃も新ちゃんに似てるわって思ってたけど、新ちゃんより男らしいわね」

「おい!!」

「えつと、あの……?」

着いていけない新一の両親に首を傾げながら快斗が記憶を辿る。

「フフ、『綺麗』と『おばさん』は一緒に使わないようになったかしら?」

「……。ああ! あの時の!!」

「え、何だ快斗。母さんと会ったことあったのか?」

何やら紹介するまでもなく快斗のことを知っていたらしい自分の両親にもびっくりだが、もしかしなくてもコレは、先代キッド繋がりなんだろうなとジロツと優作の方を見ると、それに気づいた優作がニコリと笑ってウインクしてみた。

「……マジかよ」

何だかこの親には色々と秘密が多すぎる気がしてならない。偶然とはいえ、息子同士も知り合いになったなんて、シャレにならないのではないか。しかも、やはり「怪盗」を通して出会ったのだ。どこまでも腐れ縁なのか、世間の狭さに啞然とするばかりだ。

「それじゃあ……、新一の誕生日にこうしてみんな勢ぞろいしたと
いうことで!」

久しぶりに聞いた自分の父親の話にちよつと感慨深いものがあつたものの、今日の目的は思い出話ではない。新一の誕生日だ。慌てて快斗が仕切り直しの声を掛ける。

「とりあえず、みんなでパーティーでもしますか!」
「賛成!!」

「え、今から!？」

新一のそんな声を無視した誕生日パーティーは、幕を開けたのだった。

賑やかな朝（後書き）

【新一さん、ハッピーバースデー！】

こんにちは、ペロコです。お読み下さりありがとうございました。何とか書くペースを取り戻しつつあります。ようやくかよ、って感じではありますが、お許しを。（笑）

さて今回は、読んで分かれたと思いますが新一さんの誕生日話であります。

書いてる最中に報告はさせていただいていたんですが、このお話、オチがありません。

それでいいのか、とも思いますが終わりが見えなかったんですね。何より、ペロコにしては登場人物が多い！

初両親を書いて満足してます。いつものメンバーだけじゃ代わり映えないので。（笑）

そんなわけで、快斗さんと優作さんや有希子さんとの繋がりも出せてよかった

ただ誤算だったのは全く收拾が着かなくなったことでした。何なんだこの暴走夫婦。（笑）

口調とか違和感無いですかね？ 大丈夫でしたか？ 初書きなだけに結構不安なんですけども。うーん……優作さんが特に難しい。

オチすらないまま、ドタバタと尻切れトンボのように終わってしまいました。……時間があつたらその後とかも書きたいですね。（希望）

あ、それから。

中森警部と遠山さんを有希子さんファンに勝手にしてしまい申し訳ありません。（笑）警察関係者、有希子さんファン頻発になっちゃった。（山さんしかり）

ゴチャゴチャ書きましたが、お楽しみいただけていれば幸いです。では、今回はこれで失礼します

消せない痛み（前書き）

いつもよりもちよつと暗め？です。

大丈夫だとは思いますが、ダメだと思われたら自己判断で回避して下さい。

では、どうぞ！

消せない痛み

『会いたい』

たった一言、件名欄にそう書かれただけで本文には一切何も書いてないメールが来たのは、もうすぐ日付も変わるという夜遅くのことであった。ついさっきまで一緒にいたのに、と不思議に思いつつも、『すぐ行く』とだけ返事をしてから青子は家を出た。

今日は快斗の誕生日だったので、久しぶりにみんなでまた集まって誕生日を祝った。料理はもちろん、いつものことと言えばそうなのだが、快斗のマジックもいつものように凄かった。タネなど感じさせない滑らかな動きで、青子を含むみんなを魅了した。新一人だけは目を奪われつつもタネを見破ろうと躍起になっていたのもまた、いつものことだった。

いつも不思議なのだが、快斗の誕生日なのになぜ快斗がマジックショーをするのだろうか。

今更なことに快斗の家に向かいながら、青子は思い至り、首を傾げた。小さい頃から快斗は周りを楽しませるのが何より好きだったから、本人が満足するならばとあまり気にしていなかったが、今思えば不思議なことである。でもまあ、快斗が楽しいならいいかと、結局いつもの結論に至るのだ。

少し息を弾ませつつも、快斗の家に到着したので着いたことを知らせるためにワンコール快斗の携帯へとかけた。すると、中から玄関に向かってくる足音が聞こえてきて扉が開いた。

「悪いな青子」

「うん。何かあったの？」

「とりあえず、中入れよ」

「うん」

促されるままに、先ほどまでいた快斗の家にあがらせてもらう。

「お邪魔します」

そのまま、さっきまでみんなでいたリビングに入ると、まだ食べた皿や使ったグラスなどが片付いておらず、解散した時の状態のままだった。

「そっちじゃなくて、オレの部屋来て」

後からやって来た快斗が青子を促した。

「……うん」

普段、そんなに入ることの無い快斗の部屋をあえて選ぶのにも何か理由があるのだろうか。

快斗の後に着いて部屋へと入る。

快斗の部屋は実にシンプルだ。机があつて、ベッドがその向かいにある。そして……、青子が入ったことはないが、隠し部屋へと続くポスター。今は盗一の顔だ。床にはマジックで使うような小道具が散乱している。その辺り、快斗は意外と大雑把だったりする。

「とりあえず適当に座って」

「……うん」

言われた通り、とりあえずベッドに軽く腰かけた。快斗はその隣、少し青子との隙間を空けて、やはりベッドに腰かけた。

そのまま、何を話すわけでもなく2人とも正面を向いたまま時間が過ぎていく。元々呼び出したのは快斗の方だ。快斗が話し出さなければ会話は無い。

沈黙が痛いわけではないが、なぜ呼び出されたのか、なぜ何も言わないのか分からないままだと居心地も多少なりとも悪くなってくる。

ついに青子は口を開いた。

「……どうしたの？ 突然呼び出して」

「ん。用ってわけでもねーんだけど……。今日でさ、オレも21になったじゃん？」

「うん」

快斗らしくない歯切れの悪い話し方に違和感を感じるけれど、今はそこは問題ではない。何を言いたいのかわからない。

「でさー、親父が死んでもう12年じゃん？」

パネルに目をやりながら快斗が呟くように言う。

「……うん」

何となく不安になって、青子は快斗のいる左側を向いた。

そこには、ぼんやりとパネルを見つめる快斗がいて、やはり漠然とした不安が青子を襲う。

「時間が経つのが早いよな。何かいっぱい色んなことがあって、あつという間に今日が来てた」

「そうだね」

「たまにさ、ホントにたまになんだけと思っただよね」

「何を？」

「オレがこのパネルの向こうに行ってなかったら……って」

快斗が遠くを見つめる。もはや、視線はパネルだが見ているわけではなさそうだ。

「工藤くんたちは、こんなに仲良くなっていなかったかもね」

重たい空気を何とかしようと、わざと軽い口調で言う。

「ふ、そうかもな。でも……」

「ん？」

「もっと違う生活が待ってたんじゃないかって……思っ時もある」「……」

一瞬だけ、快斗は眉間に皺を寄せた。口調は先ほどから変わらず、ただとどしくて、でもどこかのんびりしたように思えるのに、表情はよく変化した。

快斗が言うのは、『怪盗キッド』というもう一つの姿が再び世に出たのは自分のせいだ、ということ。そして何より、自分の父親の死んだ原因を知ったこと。知ってしまったからにはもう記憶から消し去ることは出来ない。どれだけ辛くとも、どれだけ悲しくとも、消えることのない痛みを味わってしまった。

「快斗の言うことは間違っていないかもしれない。でもさ、過去に『もし』なんて無いんだよ？」

「分かってるよ、でもどうしても考えてしまう。常に考えてるわけじゃなくて、けど心のどこかに残ったままっていうか……」

快斗の視線が机の方を向く。きっと、見ているのは引き出しに仕舞われた『怪盗キッド』の一部であったモノクルだろう。

「後悔してるの？ キッドだったこと」

「……してない、つもり」

断言すると思ったのに、語尾に不安要素が付いたために青子は驚いた。

「え？ してるの？」

「いや、してるところもあるっただけ。そりゃさ、誰だって犯罪に手を染めて後悔しないやつなんていねーだろうし、……青子にも心配かけたし」

「青子？」

「警部に黙っておかないといけなくなつたろ？」

「あ……」

快斗自身の問題だけならまだいい。何よりも大事にしていた青子まで巻き込んでしまったことだけは、本当に後悔している。いつだって正直で真つ直ぐな心の持ち主の青子が、自分の父親に言えない秘密を抱えてしまったのは他ならぬ自分のせいだ。そしてその罪はいつまでも消えない。

「青子、気にしてないよ！？」

「いいって。無理すんな」

「無理なんてしてない！！」

「！？」

突然叫んだ青子に、今まで遠くを見ていた快斗の目の焦点が青子に合い、目が丸くなる。

「青子は無理もしてないし、知っちゃって後悔もしてない。今の青子は今までと変わらないでいっぱい幸せなこともあるし、毎日楽しいし。そりやお父さんに言えないのって時々辛くなるけど、でも快斗が見えないところで傷ついてて、それに気付けなかった時の方が辛かったもん！ 快斗のそばにいるのに遠く感じてたあの時間の方が辛かったもん！ 気にしてないもん！」

高校2年の途中から、快斗の様子が明らかにおかしくなった。背中にそんな重たいものを抱えているとは知らないで、いっぱい傷つけた。快斗は気にするなって言うけど、知らなかったとはいえ相当キッドのことを罵った。快斗はどんな気持ちだったんだろう。

「青子は気にしてない。今も、これからも。快斗がそばにいてくれるなら気にする必要もない」

ああ、もしかしたら自分はこの言葉を待っていたのかもしれない。

いつだって、心の片隅に残る後悔は青子に絡んだものばかりだった。青子に余計な負担を負わせた、青子に言えない秘密を持たせた、青子を心配させた……。常に付き纏う後悔はどれだけ自分に言い聞かせても消えてくれなかった。今日は特にそれが大きくなりすぎて、思わず青子を呼び出してしまったけれども。青子は何も聞かずにただ来てくれて自分を救ってくれた。

「快斗、最近寝てないんでしょ？　もしかして、このことを考えてたから？」

「え……、何で」

「快斗のこと見てたら分かるよ」

「……………参った。降参です」

「ふふ、よろしい」

まさか眠れないことまで見抜かれているとは思わなかった。友人たちも、新一でさえも気付くことはなかったのに。まったく、敵わない。分かっていて今まで言わなかったことも含めて、青子には頭が上がらないと思う。

「居てあげるから、快斗寝なよ」

「青子ちゃんが膝枕してくれたら寝れるな」

「えー？　もう、仕方ないなあ。はい」

「え、マジで？」

「冗談だったのに。」

ベッドに座って、部屋の壁にもたれて青子は足を伸ばす。

「寝ないの？」

「寝る!! 寝ます!!」

初めてしてもらった青子の膝枕に、らしくもなく緊張しながら体を横にする。

「あー、いい眺め」

「は!？」

「青子の顔、下から見ると新鮮でいいな」

「何ふざけたこと言ってるのよ!」

「……サンキュな」

それっきり、快斗は目を閉じた。

しばらくすると、快斗の静かな寝息が聞こえてきて青子はホッと

息を吐く。快斗が眠れていないことは気付いていたけど、何か理由があるのかもしれないと思って聞かずにいた。まさかこんなこと考えているなんて思わなかったけれど。

「おやすみ、快斗。いい夢を見れますように」

最近よほど眠れていなかったのか、すぐに深い眠りに落ちたことを感じた青子は、そっと身を屈めて快斗の額に口付けた。

消せない痛み（後書き）

【快斗さん、ハッピーバースデー！！】

はい、というわけで。お楽しみいただけましたか？ と聞くのは今回はおかしいですね。自覚してます。いつもとは全く違います。雰囲気も文体も何となく変えてみました。たまにはいいかな、と。

何でこんな誕生日話になったのかと言いますと……まあもちろん、ペロコが病んでるとかではなく（笑）、書いてみたかったというのが第一にあります。病んでるのはペロコではなく快斗さんです。1つ年を重ねるごとに、快斗さんはきつと盗一さんのことを思っていると思うんです。快斗さんがキッドのことを知った日は明確になってませんが、確か8年前という設定のはずです。8年って長いですね。8年経って知った真実って凄く複雑だったと思うんです。……話がそれましたね。

で、その悩んでることで弱ってる快斗さんを励ます青子ちゃん、というのが次に書きたかったところですね。ラストなんて特に！（握りこぶし）

おでこにキスするって凄く神聖な行為のようにペロコは思うのです。悩んで弱っていく快斗さんに気付いていながら、快斗さんが言い出すまで何も無かったかのように振舞うんです。大人（笑）たまには優位な青子さんもいいですよ！

ちょっといつもと違う弱った快斗さんと大人な青子さんという、新しい試みに挑戦してみたんですが、どうでしたか？ 本当に受け入れてもらえるのか正直なところかなり不安なんですけど、大丈夫ですか？ また感想聞かせてください。

いつもギャグ要素満点でお送りしてる「メモリアルデー」の中に入

れてしまってもいいのかも悩んだんですが、せつかなので組み込んでみました。

さて、次は七夕です、ね……。うん、無理だろうなあ；

平次を読みたいとの意見があるので、彼を出したい気持ちはあるんですが……。これまた七夕とミスマッチだよ！（笑）どうしようかなあ……。ミスマッチだからこそその挑戦でもしてみますか？ 時間無いんだけど。

どうしようかな。ちょっと考えてみますね。また何か読みたいものなどあれば、いつでも感想やメッセお送りください。出来る限りご希望を叶えたいと思いますので。
ではでは、長々と失礼しました。

夢と現実

肌寒くなってきた秋の夜、その男は何の前触れもなくそこにやって来た。

ピンポーン。

鳴り響いたチャイムの音に顔を上げた新一は首を傾げた。特に来客予定はなかったはずだ。それも、こんな夜になってからなど。が、しかし、だからといって居留守を使うわけにはいかない。課題に集中していた頭を切り替えて玄関へと向かった。

「はいはい、どちらさ……ま？」

ドアを開けながら尋ねた言葉は妙なところで途切れてしまったために、やけに間抜けになってしまったな、などと頭は冷静に考えているものの、目の前の光景を呆然と見つめている。

「Trick or Treat！」

ドアを開けた先にいたのは、見慣れてはいるもののここにいるのはおかしいであろう姿。そもそも、小説の登場人物なのだから現実にいるのはおかしいはずだ、と今更なことを思ってみる。

「何やってんだ、クソ親父……」

呆れてドアにもたれかかりながら、目の前に立つ“彼”に向かって言い放った新一の言葉はお世辞にも丁寧とは言いがたいものだった。……しかし、仕方がない。“彼”は『闇の男爵』の格好をしてい

たのだから。

玄関で話すのもおかしいし、何より寒いということで、ひとまず部屋に上がってもらい問いただすことにして、リビングへと場所を移動した。奇特な格好をして現れたとはいえ、仮にも自分の父親である。親しき仲にも礼儀ありだなと自分を奮い立たせてキッチンでコーヒーを入れてから、その奇特な格好をした父親の前へと戻ってきた。

「で、マジで何の用だよ……」

持ってきたコーヒーを出してやり、ソファに座りながら尋ねる。

「言っただろう？ 『おかしをくれなきゃ、イタズラするぞ』と」

「そんなこと言い、わざわざロスから戻ってきたのかよ？ 母さんは？」

「今回は別行動だ」

「……。つまり原稿から逃げたんだな？」

「私はそんなこと、一言も言っていないよ？」

言うてなくても言外にそうとしか聞こえねえんだよ、という突っ込みは心の中に留めておいた自分を褒めてもらいたいと切実に新一は思った。

「そんなこと言い、戻ってくるような性格してねえだろ？ 何が

目的だ」

「相変わらず夢がないねえ新一。もう少しロマンというものを求めてみてはどうだい？」

「……。うつせーよ。オレは現実主義なんだ」

「そんな現実主義な新一は、大学を卒業してどうするつもりだい？」
「……？」

いきなり飛んだ話の中身に一瞬頭が着いて行かなくなったが、すぐに言いたいことは理解した。

「それを言いに来たのか」

「私は心配なんだよ新一。きちんと大学を卒業してくれるのは嬉しい。しかし、その後は？ 本当に探偵になるのかい？ 事務所を開いて？ どこに？ どうやって？」
「……………」

続けて尋ねられ、思わず黙り込んでしまった。

幼い頃からホームズに憧れて探偵を目指していた。高校に入ってからあの事件が起きるまでは、それなりにメディアにも出て注目も浴びていたし、実績もあった。けれど、あの事件以来メディアに出ることはなくなり、ひっそりと時々呼び出されて解決する程度になった自分の知名度は明らかに以前よりも下がっている。

そんな状態で、事務所を開いても確かに最初は軌道に乗らないかもしれない。でも。

「オレの夢は探偵だ。それは昔から変わらねえ。……言われるまで

もなく、実現してみせるさ」

「何か策でもあるというのかい？」

「別に何も考えてねえよ。ゆっくり考えるさ。卒業してすぐに事務所開くっていうわけでもないんだし。そもそも、事務所作るかどうかすら決めてねえんだから」

真っ直ぐ、じつと目を見て話す新一を、こちらもじつと見返していた優作は、時間を置いてから、ふうと息を吐き出した。

「そういうことなら仕方ないね。私が言っても聞く子じゃなかったのは昔からだ」

「悪かったな」

「そんな風に育てた覚えは無いんだけどねえ」

「……育てられた覚えもねえよ」

ジロリと、今まで真っ直ぐだった視線を疎ましげなものに変えて新一が優作を睨む。

「何の真似だ、……快斗」

「あらら。バレてたの？」

つい先ほどまで“優作”の口調だったものは、一瞬で聞きなれた快斗のものに変わる。さらに言うならば、その雰囲気も姿勢も、見慣れた快斗のものだ。……ただ、格好だけは闇の男爵のままだが。

「いつ気付いたの？」

「夢がないって言われたとき」

「あちゃー。そこかあ……失敗したなあ」

「抜かせ。どうせオレが気付くかどうか試してたくせに」

それと、もう一つ。そう言って人差し指を立てながら新一は言う。

「これは悔しいことに今気付いたことだが、オメー、全くコーヒーに手をつけてないだろ」

「あははっ！　そこまでバレてんの？」

「探偵舐めてんじゃねーよ」

それでも、おそらくはその一言が無ければきっと自分は気付かないままだっただろうと新一は思う。コーヒーから目を逸らせるために、ふざけたことを言い始めたのだろう。現役から引退したとはいえ、快斗の変装の腕は健在だ。口調も雰囲気も優作そのものだった。

怖いやつだぜ、全く……と身内すら騙してみせるその手腕に舌を巻きながら、ところで、と話を元に戻す。

「マジで何なんだオメー。いきなり」

「んー。今日ってハロウィンだったじゃん？　だから久しぶりにしてみたの、変装」

「いや、そっちじゃなくて探偵の方」

「あ、そっち？　それも別に特に意味はないんだけどー、何となく？」

「……そうか」

『何となく』で済まされるようなものではない理由があるような気がしたが、快斗はきつとこうなったら口を割ることはない。流されてやる。

「突然ごめんねー？　課題やってたんでしょ？　もう帰るし続きど

うぞ」

そう言っ、口をつけていなかったコーヒーに、どこからともなく取り出した砂糖をどばどばと入れながら軽い口調で言い切る。

「何でオメーがそこまで知ってんだよ」

「秘密」

「……はあ、それ飲んだら適当に帰れよ」

「はい！」

大量に砂糖の入られたドロドロのコーヒーを見て思わず顔をしかめつつ、新一は自室に戻っていった。

どうも、自分はどこかで迷っているらしい。そんなことに気付いたのは、つい最近のことだった。周囲が就職活動だとかで動き始めたときに、全く動こうとしなかった自分は、何の疑いもなくマジシャンになるからだ、と思っていた。けれど、不意に襲ってきた得体の知れない何かが自分の中にストップをかけた。

『お前は怪盗、犯罪者だったんだ。そんなお前がたくさんの人間を不幸にしたその手で魔法を紡ぐことが許されると思っているのか？ 夢を叶えるなんて図々しいと思わないのか？』

頭の中に響いた名も無き声に、手が震えた。自分の夢を追うことが怖くなった。

だから、新一に聞いたかったのかもしれない。口を大にして言うことの出来ない秘密を抱えてしまった新一は、幼い頃からの夢を追うのかどうか。ちょっとイタズラが過ぎたかもしれないが。

でも、聞いて良かったと快斗は思う。快斗の正体に気付いた上で、あそこまで真剣に新一は答えたのだ。きっと何かしら気付いていて何も言わないのだろうと思う。そういうところ、新一は優しすぎる人だから。

甘いコーヒーを飲み干した快斗は、ひらりと右手を翻し、再び何も無いところからある物を取り出した。

「甘くなかったけどコーヒーごちそうさま」

自分で甘くしたくせに、と新一が聞いていたなら文句を言ったであらう一言と、その物をテーブルの上に置いてから、静かに快斗は帰っていった。

空になったコーヒークップと、手作りだと思われるカボチャマフィンを、窓から差し込む月明かりが照らしていた。

夢と現実（後書き）

【ハッピーハロウィン！】

お久しぶりです、ペロコです。ハロウィン話、無事に更新できました。

さて、話については別に何も言いません。が、これだけは言っておきたい。

何を隠そうこの話、…思いついたのは本日15時でした。↑！！

いやあ、人間やれば出来るものなんですね。昨日、ボソツと呟いた報告に、反応を下さった方がいることに今日になってから気付いて、考え出して形になったものです。

よかった、……期待に沿えてるかどうかはともかく（笑）、何とか形になってよかった。

どうも快斗くんが暗くなりがちな気がしましたが、今回は新一さんに慰めてもらいました。無理矢理ハロウィンを絡めた感じになっ
てしまいましたけど、もしも明るいバカ話を期待されてた方には申し訳
なかったです。

実際にペロコ自身が忙しくなってきた身ですので、小説の更新は今
まで以上に厳しいものになると思われます。でも、時々いたたく
メッセージは大切に読ませていただいておりますので、これからも
見放さないでいただけると嬉しいです。

では、毎度のことながら後書きで長々とすいませんでした。

思い切り

街中がバレンタイン一色になり、チョココレートの匂いが充満する時期が今年もやってきた。百貨店などでは、女の子が密集し、あれやこれやとチョココレートを吟味する。

バレンタインにチョココレートを贈るという習慣は日本のチョコレート企業が発案したものだというのは有名な話だが、実際それでチョコレート企業は非常に儲かっているのだから、本来の風習だとかそういったものは、もしかしたら関係ないのかもしれない。

さて、そんなチョココレートと女性一色に染まった百貨店の地下特設売り場で、和葉は迷っていた。

「アカンー！ どないしょー！」

東都の街では珍しい関西弁が大きな声で響くが、それ以上の女性のワイワイとした喧騒に吞まれている。百貨店としてもこの時期は大きな稼ぎ時らしく、地下での特設販売はもはや定番スタイルとなった。その地下で和葉が迷う理由はもちろんチョココレートのことに他ならない。

高校生の時には、なかなか勇気が出なかったことと素直になれなかったこともあり、チョココレートを渡すことが出来ていなかったが、東都に出てきて晴れて平次とも恋人と呼ばれる関係になり、それなりにラブラブな生活を送っている和葉からすれば、バレンタインにチョコをあげるのは当然のことだった。

が、しかし。今年はどうしても忙しく、事前に準備をすることが出来ておらず今に至る。昨年と一昨年は頑張って手作りにも挑戦し

だが、もう時間もない。当たり前だ、当日なのだから。

「平次との待ち合わせまで、あと2時間！　な、何とか決めない……！」

バレンタインにデートという、これまたありきたりな予定を立てていたが、肝心のチョコレートを準備できていないこの状況に和葉は焦るばかりでなかなか考えがまとまらないでいる。そもそも、平次はそこまで甘党ではない。友人の快斗ならば、きつとたくさんのチョコレートに囲まれているだけで幸せとか言うのだろうが、そういうタイプでもない。かといって、これまた友人の新一のように、全く甘いものを受け付けられないわけでもない。きつと今のシーズン、2人は対照的な表情を浮かべていることだろう。

「って、そんなこと考えてる場合ちゃうねん！　ど、どれでもエエやろか……」

焦った時というのは、雑念が常に頭の中を過ぎるものらしい。平次とも仲の良い2人の友人の姿が頭の中に浮かんで、消えた。そんなことを考えている場合ではない。待ち合わせ場所までここから電車で20分。出来ればきちんとした恰好もしたいし、ますます時間は無い。

ぶつぶつと呟きながらチョコを1人で選ぶ姿は、人ごみの中にさらに埋もれていった。

だいぶ日も落ちてきた午後6時。服部平次は腕時計を見てイライラしながら和葉を待っていた。待ち合わせ時間自体は6時なのだから、特に遅れているわけではない。しかし、平次のストレスは溜まる一方だった。それもそのはず。

「あのー、誰かと待ち合わせですかぁ？」

「よかつたら一緒にご飯行きませんか？」

「や、堪忍な。待ち合わせ中やねん」

「そうなんですかー。残念！ 行こう」

「それじゃ……」

まただ。平次がここで待ち始めて15分。その間に今のようい声をかけられたのは何と今の2人組で10人目だった。長いこと剣道をやっているガツシリとした体格と、キリッとした表情に釣られるように、女性が声をかけては振られるという繰り返しが続く、断ることすら面倒になってきた平次の我慢は既に限界だった。元来、人に対して冷たくすることが出来ないお人よしの平次だったので、表情自体は笑顔で断るものの、内心はブリザードが吹き荒れていた。

「……遅い」

ボソッと呟いた不穏な呟きに、たまたま前を歩いていたサラリーマンが顔を引き攣らせて足早に去っていった。そんなことも気に留

めず、平次はとうとう貧乏ゆすりを始めた。

「何やねん、6時に待ち合わせなって言うたんは和葉の方ちゃうんけ」

たまらず、不満が口について出てくる。

「和葉のアホボケカス……」

「悪かったなあ、アホボケカスで」

「うおっ！？　なんや、おったんやつたら早よ声かけんか……い？」

いつの間にか背後に立っていたらしい和葉に独り言（それも悪口）を聞かれた焦りもあって、勢いのまま振り返ったが、言葉が途中で途切れてしまいおかしいことになってしまった。けれどそんなことも気に留めず平次は目の前の和葉に視線を止めたまま固まっていた。

いつもはポニーテールにして上げている髪の毛を下ろし、丁寧にブローしてどうやら毛先は軽く巻いているようだ。真っ赤なマフラ―で口元を覆い、白のピーコートを羽織って下はふんわりとした優しい色のピンクのスカート、黒のタイツにショートブーツ。

「大体なあ、アタシなんて昔っから平次にどんだけ待ちぼうけ食らったと思てるん！？」

和葉のグチも耳に入らないまま平次は未だ呆然としている。ハッキリ言おう。今日の和葉は彼女だという欲目を差し引いても非常に可愛かった。

ポカーンと口を開けたまま固まっている平次に、早口で平次への今までの不満をぶちまけていた和葉もようやく気づき、首を傾げた。

「どないしたん？」

「……や、エエわ。行こ」

ハッと我に返った平次に連れられて歩き出したが、和葉はドキドキしたままだった。思わず気合の入ったコーディネートをしてしまったが、おかしいところがあつたのだろうか。親友の蘭にアドバイスを受けた通り、減多に下ろさない髪の毛を下ろして、さらには軽くカールまでさせてみたのだが。やはり自分には似合わないのか、と少しガツカリもしていた。

平次と向かった先は小洒落たレストランだったが、割りとリーズナブルで学生でも入りやすい雰囲気のお店だった。一通りコースで注文したものの、2人の間にはあまり会話がなかった。慣れない雰囲気と和葉にとってはさらに慣れない恰好までして、それはそれは緊張していたのだ。

料理が来て、食べ進めるものの、「美味しいな」「うん」程度の会話しか出てこないまま、メニューが全て出てしまう始末だった。

せっかく頑張つて気合を入れておしゃれて来たのに……と落ち込みながら、レストランからの帰り道を平次と並んで歩いた。それでもまだ今日の目的は果たせていないことを思い出し、和葉はふと立ち止まった。

「どないしてん？ 食べすぎで腹でも痛なつたか？」

ムードの欠片も無い言葉が平次から飛び出したが、緊張している和葉の耳には入らない。

「……平次」

「な、何やねん」

どうやら緊張が伝わってしまったらしく、少し戸惑いがちの返事が聞こえる。

「……、コレ、バレンタインのチョコ……」

「お、おお……」

思い切って差し出した手に握られているのは、数時間前悩みに悩んだ末選んだ、ちょっと高めのビターチョコトリュフだった。綺麗にラッピングまでしてもらい、可愛らしい仕上がりにはなっているが、差し出す手が震える自分に和葉は嫌になる。どうも、こういうイベントは緊張してしまう。

一方の平次は、震える手で差し出されたチョコと、俯いたまま顔を上げない和葉が愛しくて仕方なかった。今日声をかけてきたどんな女の子よりも魅力的だというのに、こういう初々しい行動を取る辺りが好きだということを改めて自覚し、自分で恥ずかしくなっていた。少しは自分に自信持てや、と思わなくも無いが、普段から割りりと恋愛に関しては口下手なこともあり、素直に褒めることも出来ないため和葉にはそういった男の事情というか心情が上手く伝わっていない。自業自得以外の何物でもないが、思わず頭を抱えたくなってしまった。

だから、行動に出てみることにした。

チヨコを差し出したまま震える手をそつと握り、驚いて顔を上げた和葉を思いつきり抱きしめてみた。我ながらキザな似合わない行動に出てしまったと思うが、腕の中で硬直した和葉が愛しいのだから仕方ないと、平次はもはや悟りの境地に達していた。夜道だということと、抱きしめてしまったことで顔が見えなくてよかつたと平次は心底思っていた。今の自分は真っ赤な顔をしているに違いない。鏡を見なくても分かる。熱が一気に集中しているのを自分でも自覚している。

けれど、腕の中の体温も同じように上がっているのを感じたら、思わず頬が緩んでしまった。

「おおきに」

自分に出せる飛びつきり甘い声で耳元で囁いた後、その勢いのままチュツと耳に口をつけてしまった平次は顔をさらに真っ赤にしていたが、街灯の明かりで微かに見えた腕の中の顔は、自分以上に赤くなっていることを知り、思わず抱きしめる腕の力を少し強くした。

思い切り（後書き）

ハッピーバレンタイン！

ということ、皆様こんにちは。非常に寒いバレンタインになりましたね。ペロコです。

今年のバレンタインは平和でいきます！ と、報告は以前からしていたので知っていてもえらた方が多いかと思いますが、いかがでしたでしょうか？

ものすごく中途半端なところで終わってしまっていますが、それもまた良いではないかと。というか、このまま続けてもダラダラと長くなるだけなのでというのが最大の理由なんですが。（笑）

さて、ペロコにしては甘く仕上げてみたつもりの今回のバレンタイン。皆様はどう思われましたでしょうか？

チラチラと他のメンバーの名前を我慢できずに出てみたりしたんですけど（笑）、平和一本に絞らせていただきました。あー、むず痒い！！

こんなの、平次じゃない！ とか思いながら書きました。この「メモリアルデー」の平次は、多分一般的な平次とは違うんでしょうね。色んなところが。というか、それは平次に限らずなのかもしれないけども。

無事にバレンタイン話を書き切る事が出来てホッとしています。

また次のお話で（どのタイミングになるか分かりませんが）お会いできればと思っています。

いつものように、報告にて製作・設定裏話掲載予定ですので（笑）、またよろしければご覧下さい。

では、感想いただけたら嬉しいですv

決意

その宣言は、唐突に、でも自然に発せられた。

「平次―」

「何や？」

「オレさー、アメリカ行くわ」

「ふーん」

「……………」

「……………はあっ！？」

「あ、良かった。スルーされたかと思った」

あまりにも唐突に、自然に言われたものだったから思わず気の無い返事をしてしまったが、よくよく考えてみれば聞き捨てなら無いものではないか。そんな大事なことをなぜ今、まるで『明日の天気も雨だつてよー、梅雨つてだるいよねー』と同じぐらい気の抜けた感じで言われなければならないのか。

焦る平次だが、快斗は気にも留めない。

「ちょお、自分！ いきなし何を言うてんねん！？ 新手の冗談か！？」

そうだ、よくよく考えてみれば、人を騙すことが好きな（語弊を生みそうな発言だがここは考えない方向でよろしくby平次）快斗のことだ。とても素直な（何や、悪いか！by平次）自分を騙そうという発言だったのかもしれないではないか。

そう思い直し、問い質すものの、快斗の返事は変わらなかった。

「何の冗談でも騙してるわけでもないよ。前から考えてはいたんだ。

決めたのは昨日だけど」

「何やねん。いきなし。アメリカ……アメリカ？　アメリカっちゅーても広いやろ」

「うん。ラスベガスにね、行こうと思って」

「何や、一攫千金狙ってるんか？　そないなことせんでも、黒羽やったら地道に……」

「まさか。腕試し……じゃないな。修行かな？」

「……つまりアレか。本場のショーを間近で見て腕を鍛えなおそうっちゅーことか」

「飲み込み早くて助かるね」

ニコニコと言ってるように思えるが、平次の位置からは快斗の表情までは見えない。

快斗の誕生日を祝うパーティーを終えた後、平次だけ呼び止められたからおかしいとは思っていた。毎年毎年、懲りもせずに行われるパーティーに参加したのはいつものメンバーだったにも関わらず、パーティーも終わり帰ろうとしていたのを快斗が呼び止めた相手は、意外にも平次で、そのことに平次が1番驚いていた。

しかも、呼び止められて残ったものの何を言い出すわけでもなく、ただリビングの椅子に座り、窓の外をボーッと眺めているだけの快斗に、そろそろ痺れを切らしそうだったタイミングで、冒頭の宣言だ。驚くよりもまずはスルーしてしまうのは仕方ないではないかと平次は自分の中で誰かに弁解していた。

「どないしてん。黒羽の腕なら別にそんなことする必要ないやろ？」
「何言ってるの。そんな褒めてもバラの花しか出ないよ？」

ポント、軽快な音と少量の煙幕が上がり、快斗の手にバラの花が一輪握られているが、相変わらず上手だ。目の前で行われたにも関わらず、タネが分かっているにも悟らせないその腕に、何の不満があるというのか。

「充分やんけ……」

いやその前に、だいたい褒めるとバラが出るなんて聞いたこと無い。相変わらずキザだ。

「ふふ、ありがと。でもね、やっぱり見たいんだよね。本場のマジック」

「……何で今なんや？」

「うーん。22歳になったからかなー。親父の見てた光景を実際に見たくなっただんだよね」

「黒羽盗一か」

快斗の父親が事故に見せかけて殺されたということは、それとなく聞いてはいたが、快斗から直接聞いたことが無い平次にこんな話をするとはとても意外だった。

「親父が海外で何を見て、日本では何を見て、で、キッドをしながら何を見てたのか……追いかけてみたいんだよね」

「後の2つは充分見たから、最初の1個ちゅーわけか」

日本でも、まだ大学生でありながらそれなりに知名度のある快斗だ。ショーに呼ばれることも多数ある。キッドについては言わずもがなだ。

「うん。親父を越えられるとは思ってないけど、せめて肩を並べる

程度にはなりたいたのがずっとオレの夢だったからさ」

「……………」

相変わらず窓のほうばかり見て、平次の顔を一切見ずに語られる快斗の思いは、雰囲気は、普段とは比べ物にもならないぐらい真剣で、まじめだった。

「ここ1年ぐらい、本当に色んなこと考えて、色んなこと聞いて、色んなことやってきたら、決心ついたんだよね」

「中森さんには言っただんか？」

「……言ってないよ。でも青子は多分、何となく気付いてると思う。遠くに行っちゃうのかも、程度だと思うけど」

「……なんで俺に言っただんか？」

実は、この宣言を聞いてからずっと疑問だった。平次は、大学に入ってから知り合いだ。いや、キッドも含めるともちろんそれ以前からの付き合いにはなると思うが、新一ほど密接に関わっていったわけではないし、顔を合わせたのも数えるほどだ。そんな自分になぜ。

「多分、平次が1番いい距離感にいたからだよ」

青子は多分気付いている。もちろん、ちゃんと出発前には言っつもりだが、今すぐに言うはずと悲しい顔を見ながら過ごして行かなければいけないのではないかとちょっと不安だった。きっと、賛成してくれると自惚れではなく思っているし、笑顔で見送ってくれるとは思う。でも、まだ言いたくないというのは自分の我侭だった。その青子の友人である蘭や和葉も、青子との繋がりが深すぎて言い出せない。

そして新一は……、新一は多分青子とは違う意味で近いところに
いすぎた。過去に背負ったもの、今の生き方、そして、守りたい大
切な人の存在。あまりにも自分と似すぎた境遇に、言い出せない自
分がいた。

だから、平次だった。浅くも無いが、深く親密な付き合いの長さ
があるわけでもない。快斗にとって、平次はちょうどいい、本当の
『友人』だった。

「さやか。まあみんなに言うタイミングはもちろん黒羽に任せるけ
ど……、それまで黙っといたるわ」
「サンキュ」

ああ、本当に自分は恵まれている。犯罪者だった自分には、こん
なに大切な友人がいてくれる。大切なライバルがいてくれる。大切
な守りたい人がいる。

「青子にどうやって切り出すかなー……」
「ズバッと言ったたらエエんや！」
「……」

少々（どころではなくかなり）雑なアドバイスをくれる友人だが、
最初に言っただけ良かったと思う。

さあ、青子には何て言おうか。

決意（後書き）

快斗さん、そしてあー山先生お誕生日おめでとうございます！
お久しぶりです、ペロコです。よかった、何とか今日中に更新できた…。

そして衝撃の展開ですけども。（笑）↑笑えない。

まあその辺りについては活動報告のほうにてまた後ほど書きます。
このネタは割りと前から思いついていたんですが、どうにも形にならなくてもしかしたらお蔵入りか？ とも思っていたんですが、本日何とか間に合いましたので日の目を見ることになりました。

では、今日は後書きは短く！ まとめさせていただきます。

また次の機会に、次のお話でお目にかかれたらいいなと思います。
読んでいただきありがとうございました。感想などお待ちしております。
おります。

本心

恋人たちのクリスマスイブ。街はイルミネーションで輝き、その下を寄り添って歩く恋人たちは、凍てつくような寒さなど感じることはない。互いのぬくもりを確かめながら、時折頭上を見上げて綺麗に電飾された木々やビルなどを見て楽しむ。

そんな幸せな空気に溢れた東都の街中で、蘭は待っていた。相手からは既に1時間ほど前に遅れると連絡をもらっているのに、怒りはしない。ただ、寒いだけだ。身体も心も。

いつだって自分は待つ立場だなーと、目の前を通り過ぎるカップルを見送りながらふと蘭は思う。

もう過去のことになった、高校の時のあの辛い思い出を筆頭に、中学の時には朝に弱い新一を起こしに毎朝工藤邸まで通い、新一が起き出して来るのを家の外で待っていた。それ以外でも、いつだって約束の時間に来たことのほうが少ない。蘭のライバルはいつも人ではなくモノだった。事件、謎、推理小説……、それらの誘惑に彼が打ち勝てたことは少なく、いつも蘭は待っていた。

そして、今日も。

今日ぐらい、と思うが、今日の彼は警察に呼ばれて行ってしまった。もちろん、蘭だって分かっている。彼の推理力、洞察力、身体能力と、事件解決を1番に考えている警察の利害が一致していることだって。聖なる夜に刑事さんだって早く帰りたいことだって。一刻も早く事件が解決することが最善なことだって。それぐらい蘭にだって分かる。探偵の父、弁護士之母、そしてやはり探偵の彼を小

さい時から見てきた蘭だからこそ1番分かっている。
けれども。しかし。だけど。こんな時ぐらい、自分を1番に考え
て欲しいと思うのは我侭なのだろうか。いつだって待つことしか出
来ない自分が時々歯がゆく感じることもある。

「蘭!!」

人ごみの中から聞こえた彼の声は蘭の耳にまっすぐに届いた。全
速力で人波を掻き分けながらこちらに向かってくる彼の姿が見える。

「新一、……お疲れ様」

「悪い!! 中で待ってるって言ったのに……、身体冷えるだろ?」

「うん、でも今からご飯食べに行くのにお店に入るのもどうかと思
って……」

駆けつけて1番に謝罪、そして次に自分の身体を気遣ってくれる
新一はとても優しいと思う。だからいつだって許してしまうのだ。

「それじゃ行くか。店の方には遅れるって俺から連絡してあるから

さ。ここからちょっと歩くけど、大丈夫か？」
「うん」

新一が予約していたレストランは、かつて高校生の時に新一に連れられて来た米花センタービルの展望レストランとは違い、もつとカジュアルな大学生に見合った、でもお洒落なレストランだった。2人でコースで注文し、食前酒で乾杯して次々に出てくるコース料理に舌鼓を打つ。どれもとても美味しく、蘭は大満足で、終始笑顔だった。

レストランでの食事も終わり、特にこれといった会話も無い中歩く帰宅中に、ふと新一が思いついたかのように蘭に尋ねた。

「ちょっと、うちに寄ってかないか？ コーヒーぐらい出すしさ」
「え？ うん、いいけど……」

先ほどのレストランでの最後の飲み物が紅茶だったこともあり、コーヒーを飲みたに新一の家に行くのもいいかもしれない。コーヒーに対する並々ならぬ拘りを持つ新一の家にはとても良いものが揃っているのだし。

そんなわけで、新一の家へと寄り道をする事になった。

「暖房入れて待っててくれるか？ 今淹れてくるから」
「うん」

相変わらず広い工藤邸のリビングに上がり、慣れた動作でエアコンのスイッチを入れ、ソファに座らせてもらって待つこと数分。カップをトレーに乗せて新一がリビングへと戻って来た。

「改めて、今日は遅れて悪かったな」

「いいよ、事件だったんでしょ？ 慣れてるもん、こっちは」
「……、そっか」

新一の返答に間があつたのが気になる。何かおかしいことを言うただろうか。

「どしたの？ 何か様子変だよ？」

「いや……、……あのさ、蘭」

言いにくそうに目をそらしつつハッキリしない口調で話す新一が珍しく、蘭は首をかしげながら新一の言葉の続きを静かに待った。

「……辛く、ないか？」

「え？」

窺うように。気まずそうに。新一が聞いた意味が分からず、蘭は再度首をかしげる。

「いや、オレさ、いつも待たせるじゃん？ 事件だって言われたらじっとしてられねーし。新刊が出たらそっちに集中しちまうし。だから、その……」

少し早口になりながら、でも、最後は小声になりながら新一が言った内容に目を見張る。そんなこと思ってくれていたのか。何も気にしてないとは言わないが、改めて言われるとは思わなかった。それも、同じことを蘭も今日思っていた。

「新一は、さ」

「うん」

だから、今日ぐらひは素直に自分の思っていることを言っても構わないだろうか。そう思いながら口を開いた。

「確かに、事件だ新刊だつて私のことほつたらかしにして、そつちに集中しちゃつて、寂しくなつた時もあったよ」

「そつか」

「でもね、それが新一なんだもん。私の知ってる新一は、そういう人なの。私の好きな新一は、そういう人なの。そりゃ、私を優先して欲しいって思ったこともあったし、今日だつてちよつとは寂しかったし……」

「……………」

「でも、やっぱりそれが新一だから。事件だつて聞いたら、居ても立つてもいらなくなつて、身体が反応して行つちやうとことか。新刊が出たら食事睡眠も何もかも放棄して、そつちに集中しちゃうとことか、ね」

自分で言つてておかしくなつて、思わず蘭は笑みを浮かべてしまった。何でこんな人のこと、好きなんだろう。最低じゃないか。普通は彼女を優先して欲しいものなのに。

「で、こうやって私のこと気にしてくれるところもね」

新一を誘惑するものはたくさんある。でも、それらの誘惑に負けてしまった後のあの、気まずそうな顔や、今みたいにこうして蘭を氣遣ってくれるところとか。

「そういうところ、全部ひっくるめて新一だと思ってるから。だから、辛くなんかないよ」

「ら、ん……」

「私のこと気にしないでなんて、そんな大人なこと言えるほど余裕は無いけど、でも大丈夫だよ」

それは偽りの無い蘭の本心。頬を少し染めつつ蘭の言葉を聴いていた新一は、それならば、と真面目な顔つきで今日最大の目的を果たすことにした。

「蘭の言うとおり、オレは事件とか新刊とか聞いちゃうと多分これから蘭のことをほったらかしにしてしまうことが出てくると思う」

「うん、それは……」

「分かってる。それがオレだって認めてくれることも今聞いたから。でも、寂しい思いさせてるのも本当だから」

「……うん」

「けど、こんなオレだけど、ずっと蘭のことは大切だったし、これからも大切にしたいって心から思ってる」

「……」

「だから」

真面目に静かに言葉を紡ぎつつ、新一はポケットから小箱を取り出した。

「今すぐなんて言わない。でも、いつかそこにオレが埋めたい。埋めることを認めて欲しい」

そう言いながら新一に手渡された、綺麗なクリスマスラッピングが施された小箱を開けば、そこに輝いていたのはシンプルなシルバリング。白くて細い、蘭の指にぴったりと合う、小さな宝石が輝くもの。

震える手で小箱を掴んだまま、目に薄っすらと涙を浮かべつつ固まったままの蘭の手を箱ごと包み、新一は蘭の左手を取り、その指に静かに口付ける。

「し、新一……」

その瞬間、真っ赤に染まった蘭の顔を、小さく笑みを浮かべながら新一が見上げ、そして問う。

「蘭、返事は？」

「新一じゃなきゃ、やだ……！！」

涙を浮かべて抱きつきながら言いかけた『Y e s』の返事は、
一の口の中へと消えた。

本心（後書き）

ハッピーメリークリスマス!!

大変お久しぶりです、ペロコです。非常に寒いクリスマスとなりましたが、いかがお過ごしでしょうか。

諸々いっぱい言いたいことはございますが、ココで書くと非常に長くなるので、いつものように報告にてそちらは語らせていただきます。

皆様にも、素敵なクリスマスが訪れていますように。

そして、今年も1年大変お世話になりました。よいお年を!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2032e/>

メモリアル・デー

2011年12月24日13時00分発行